





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー  
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・バックー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ベリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト  
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード  
ローレン・C・ダン  
レックス・D・ビネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー  
F・エンツィオ・ブッシェ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：

ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：

デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：

ボニー・ソーンダース

デザイナー：

ロジャー・ギリング

制作：

ノーマン・ブライス

もくじ

神は赦したもう.....スベンサー・W・キンボール.....1  
 妻の教会の責任を助ける.....ジェラルド・R・ミーファー.....11  
 キンボール姉妹の助け.....ジャネット・ピーターソン.....14  
 友人に福音を伝える、  
 グループによる家庭集会.....ロバート・L・ハン布林.....16  
 ローラの後见人.....サラ・E・ヒンゼー.....24  
 愛が鍵でした.....ジューン・ラリー・ロビンソン.....28  
 批判から改宗へ.....ジョセフ・W・ダーリング.....30  
 失敗したら赦してくれ.....  
 ティーダ・ウッドワード・.....31  
 ファンズワース  
 予期せぬ収穫.....グラディス・C・ファーマー.....34  
 ナヒードのみみつ.....ドーン・エイセイ.....38  
 ジョセフ・フィールディング・スミス.....42  
 すくいぬしをみじかに.....ジョリーン・メレディス.....44  
 おもちゃばこ  
 どこにかくれているかな?.....48  
 ローカルページ.....50

1982年9月号 聖徒の道 第26巻第9号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

制作・配送 東京ディストリビューション・センター

東京都世田谷区上用賀4-9-19

電話 03-427-4311

印刷所 株式会社 精興社

定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA 0493JA Printed in Tokyo, Japan.

© 1982 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

定期購読は、「聖徒の道用予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会・東京ディストリビューション・センター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届け先の変更がありましたら、早急にTDCにご連絡下さい。

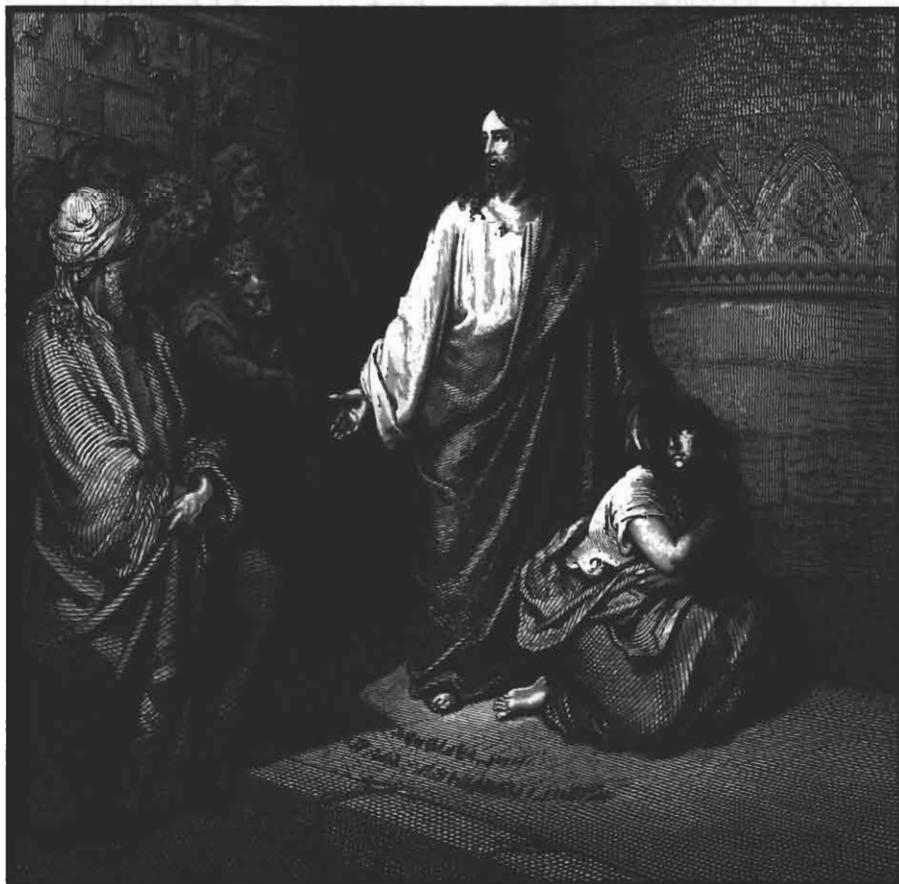
□□□□□□□□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□  
□□□□□□□□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□  
□□□□□□□□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□

大管長会メッセージ

# 神は赦したもう

大管長

スペンサー・W・キンボール



## ●神は赦したもう



「見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つければ、その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」(教義と聖約58：42—43)

**罪** 人の完全な悔い改めと主イエス・キリストが贖罪の犠牲で表わされた慈悲がなければ、罪からの清めは不可能である。このような方法によってのみ、人は罪から立ち直り、癒され、洗い清められ得るのである。さらに永遠の栄光にまで至る資格を得ることができるのである。この救い主の偉大な役割について、ヒラマンは息子たちにベンジャミン王の言葉を思い出させている。

「この世に降臨して身代りの贖罪をなしたもうはずのイエス・キリストによらなければ、人が依り頼んで救われる道も方法もない、またキリストは世の人々を贖うために降臨したもうことを忘れるな。」(ヒラマン5：9)

ヒラマンは、アミュレクがゼズロムに告げた言葉を思い出させて、赦しを得るために人の側でなすべきこと、つまり罪の悔い改めについて強調している。

「その時アミュレクはゼズロムに告げて、主キリストはその民を贖うために必ず降臨したもうが、民を罪のあるままには贖いたまわらない。その罪から民を贖うために降臨したもうと言った。

もしも人々が悔い改めるならば、主はこれをその罪から贖う権威と能力とを御父か

ら授かりたもう。」(ヒラマン5：10—11)

これら聖句は罪人の心に希望をもたらす。事実、希望は悔い改めへの強い誘因となる。この希望がなければ、罪人が求められる努力は困難でこの上なく長いものに感じられるだろう。特に罪が非常に重い場合はなおさらである。

私は数年前に経験したことから、この感をさらに強めた。私の家から大部離れたある都市でのこと、ある若い女性が私のところにやって来た。彼女は夫に言われて、いやいやながらやって来たのだった。彼女は自分は姦淫の罪を犯したと告げた。彼女はやや強情で頑固なところがあったが、ついにこのように言った。「私は自分がしてしまったことを承知しています。私は聖典を読んでいきますので、罪の結果をよく知っています。私は地獄に落とされ、決して赦されることはないのです。こんな私がなぜ今さら悔い改める必要があるのでしょうか。」

私は彼女に答えた。「姉妹、あなたは聖典を理解していらいっしょいませぬ。神の力も、神の慈悲もわかっていません。あなたは、この非常に重い罪から赦されるのですよ。ただし、そのためには心からの十分な悔い改めが必要になります。」

こう言ってから、私は彼女のために次のような主の言葉を引用した。

「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまぬようなことがあろうか。

たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。」

(イザヤ49：15)

また、悔い改めて神の戒めに従う人はだ



「身代わりの贖罪を  
 なしたもうはずの  
 イエス・キリストに  
 よらなければ、  
 人が依り頼んで  
 救われる道も  
 方法もない」



れでも赦されるであろうと、主がこの神権時代に語られた言葉も示した。(教義と聖約 1 : 32参照) その訪問者は当惑したようだったが、それでも信じたいという様子だった。私は言葉を続けた。「結局、罪の赦しは、赦されない罪を犯した人を除いて、一生懸命に長い間心から悔い改めるすべての罪人に与えられるのです。」

彼女は大部譲歩してきたが、それでも私の意見に抗議してきた。だが彼女は私の言うことを本当に信じたいと思っていた。彼女は今までずっと姦淫は赦されないと思っていたと言った。私は再び彼女に聖句を示した。これはよく引用されるイエスの言葉である。

「だから、あなたがたに言っておく。人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない。

また人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない。」(マタイ 12 : 31-32)

彼女はこの聖句を忘れていたのである。彼女の目は輝いた。そしてうれしそうに言った。「本当でしょうか。本当に赦されるのでしょうか。」

まず最初に必要なのは希望であることを知っていた私は、数多くの聖句を彼女のために読んだ。このようにして、彼女の心に目覚めた希望をさらに大きいものにしようとしたのである。

神が罪人をお赦しになることを実感として知るのには、どれほどの喜びであろうか。イエスは山上の垂訓で言っておられる。「あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。」(マタイ 6 : 14) もちろん、これには条件がついている。

現代の啓示で主は予言者に、「見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし」(教義と聖約 58 : 42) と言っておられる。主は同じことを予言者エレミヤを通じても告げておられる。「わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない。」(エレミヤ 31 : 34) 主は何と慈悲深いお方であろう。

時折、私はこの女性を思い出す。彼女は根本的には善良な女性であった。背をまっ

## ●神は赦したもう



すぐにして、私の目をじっと見ていた。彼女の声には新たな力と決意の響きがあった。「ありがとう、ありがとうございます。私はあなたの言葉を信じます。私は本当に悔い改め、汚れた衣を小羊の血で洗い、赦しをいただけるようにします。」

最近、彼女が私の事務所を訪ねてきたが、まったく別人ようになっていた。目は輝き、足どりは軽やかで、彼女が自ら語るように、全身これ希望の塊といった感じであった。希望が見え、それをしっかりとつかんだあの記念すべき日以来、彼女はもう忌まわしい罪から完全に遠のき、いささかもそれに近づくことがなかったのである。

確かに主は、その罪がどんなに重いものであっても悔い改めようと努力している人を愛しておられる。(教義と聖約1:31参照) 罪を犯してしまった人は、慰めを与え、完全な悔い改めへと駆り立てるたくさんの聖句を見つけることができる。例をあげると、すべての人にあてて述べられた啓示で、主は罪人の赦しについて言及しておられる。

「さりながら、悔い改めて主の誠命を行う者は赦されん。

而して悔改めをなさざる者は、彼のすでに受けたる光明までも取り去られん。それは、わが『みたま』常には人を励まさじ、とは万群の主の言なればなり。」(教義と聖約1:32-33)

教会の標準聖典からのこれらの戒めは、「すべての人々に及ぶものなれば、一人ものがる者なし」(教義と聖約1:2)という点を心に留めるべきである。このことは、罪を悔い改めるように呼びかけられている

のは教会員だけでなく、すべての人であり、また、非常に重い罪を犯した人だけに限定されるものではないことを意味している。また、この呼びかけに応える人には赦しが約束されている。赦しがないのに、人々に悔い改めを求めるのは何とばかりしていることであろうか。また、救いや昇栄の機会をもたらすことができなかつたとすれば、キリストの命はまったく無駄になってしまう。

時々、罪の意識が重く心にのしかかってくることがある。悔い改めようとしている人は、自分の犯した罪を振り返って見たとき、その醜さ、胸がむかつくほどのいやらしさに意気消沈してしまい、「主は私を赦して下さるだろうか」とか、「私は自分自身を赦せるだろうか」という疑問に駆られることがある。しかし、罪を犯した人が深く失望し、絶望のどん底に達し、自分の無力にあえぎながらもただ信仰を抱いて神の慈悲を求めて祈ると、静かで、細く、それでいて全身を刺し貫くような声が聞こえてくる。「子よ、あなたの罪はゆるされた。」(マルコ2:5)

聖典を読み、理解すると、人を愛し、人を赦す神のイメージが明確に浮かび上がってくる。神は私たちの父であるから、当然のことながら、私たちを押し倒すのではなく引き起こし、霊的な死ではなく私たちが生きるように助けて下さる。「わたしは何人の死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。それゆえ、あなたがたは翻って生きよ。」(エゼキエル18:32)

1836年のカートランド神殿の献堂式で、予言者ジョセフ・スミスは熱烈に祈り、罪



は消され得ると断言している。「おゝエホバよ、願わくはこの民を憐みたまえ。すべての人罪を犯せば、汝の民の罪を赦し永久にこれを拭い去りたまえ。」(教義と聖約109:34) 赦しの過程で罪が拭い去られるという考えは主も述べておられる。「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。」(イザヤ43:25)

「イザヤの言葉は、まことに偉大なる価値あり」と救い主は言っておられる。(IIIニーフアイ23:1)そして、この予言者イザヤは数々の予言の中でも極だった言葉を残している。それは、悔い改めるすべての人に対して赦しを約束した言葉である。

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。

近くおられるうちに呼び求めよ。

悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。

われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる。」(イザヤ55:6-7)

主が偉大なイザヤを通して与えられた赦しの約束は、何と栄えあるものであろうか。憐れみと赦しの約束は。私たちはこれ以上何を望み得ようか。

「主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう。

たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」(イザヤ1:18)

多くの人が性的な罪、<sup>かみい</sup>姦淫に関してひど



救いや  
昇栄の機会を  
もたらすことが

できなかつたとすれば、  
キリストの命は  
まったく無駄に  
なってしまう。



く心を悩ませている。ジョセフ・スミスは、赦しがあることを述べたたくさんの言葉を残している。また、悔い改めが「全力を尽くして行なうもの」であり、完全なものであれば、赦しをもたらすことができると証明した聖句がある。ここにジョセフ・スミス自身の記した言葉と他の予言者のものをあげる。簡単にするために、主だった部分だけを抜き出してあげることにする。

「姦淫をなしたる者<sup>かみい</sup>誠心を以てこれを悔い改め再びなさざる時はこれを赦すべし。」(教義と聖約42:25)

「見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。」(教義と聖約58:42)

## ●神は赦したもう



聖典を読み、  
理解すると、  
人を愛し、  
人を赦す神のイメージが  
明確に浮かび上がってくる。

「もしもかれが……真心より悔い改むるならば汝はこれを赦せ、われもまたこれを赦すべし。」(モーサヤ26:29)

「もはや、彼らの罪と彼らの不法とを、思い出すことはしない。」(ヘブル10:17)

イエス・キリストの教会が回復されてから約1年の後、救い主は不貞と好色の醜い罪、さらに赦しを得る条件について語っておられる。

「婦女を見て情欲の念を起す者は信仰に背くなり。『みたま』を与えらるることなし。もし悔い改めずんば、捨てらるべし。

汝ら姦淫することなかれ。姦淫をなして悔い改めざる者は捨てらるべし。

されど、姦淫をなしたる者誠心を以てこれを悔い改め再びなさざる時はこれを赦すべし。」(教義と聖約42:23—25)

私はすでに、聖霊を汚す以外のあらゆる罪は赦され得るといふ救い主の言葉を引用した。(マタイ12:31参照) ジョセフ・スミスが靈感訳聖書でこの節に、「わたしを受け入れ、悔い改める人」という非常に大切な言葉を付け加えたことは興味深いことである。次にあげる聖句がそうである。

「わたしを受け入れ、悔い改める人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、赦される。しかし、聖霊を汚す言葉は、赦されることはない。」(ジョセフ・スミス訳マタイ12:26)

ジョセフ・フィールディング・スミス長老は、この点について次のように書いている。「罪を犯し、悔い改めをしない人は決して日の光栄の王国に入ることはない。」(*Improvement Era* 「インブルーメント・エラ」



「われ汝らを聖く為し得る故に、汝らの罪赦さるればなり。」(教義と聖約60:7)

「主なるわれは死に当るべき罪を犯さずしてわが前に罪を告白し、赦しをわれに乞う者にはその罪を赦すなり。」(教義と聖約64:7)

「彼らその悪を悔い改むる時には彼らは赦されん。」(教義と聖約64:17)

「わが潔きが如く彼らも潔められんためなり。」(教義と聖約35:21)

「わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない。」(エレミヤ31:34)

「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。」(イザヤ44:22)



1955年7月, p. 542) この言葉は私たちが今まで読んだ数々の聖句と合致する。これらの聖句は次のアルマの言葉に代表されるであろう。「誰でもその衣を洗って白くしなかったなら決して救われなからである。人の衣は、……その汚れが全く洗い去れるまで清められなくてはならない。」(アルマ5:21)

私がこのようなことを述べるからといって、性的な罪やその他の罪の重大さを過小に扱うつもりはないことを理解していただきたい。そうではなくて、罪人に希望を与え、罪を犯した男も女も自分の過ちを克服し、自分自身を「小羊の血」で洗い、身を清め、浄化し、創造主のもとに立ち帰るために全力を尽くすことができるようになるためなのである。罪を犯した人は赦される可能性があるといっても、気をゆるめてはならない。人々が性的な罪を犯すのは非常にゆゆしいことであり、なかならず姦淫はその最たるものであることを再度申し上げておきたい。

私が今まで引用したすべての聖句と、その他の同様の聖句をよく読むと、大勢の人人にかかわりを持つ1843年の予言者の言葉は、その他すべての聖句とまったく一致していると考えるのが妥当ではないだろうか。

パウロがコリントの人々にこれと同じ考えを教えている。

「まちがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである。」

(Iコリント6:9-10)

ここで言われていることは真実である。確かに神の王国は、パウロが教会で見た、このような人々が住む所ではない。永遠の神の王国が、不貞を働く人、姦淫をする人、偶像を礼拝する人、性的倒錯者、盗みをする人、貪欲な人、酒に酔う人、嘘をつく人、そしる人、神に見放された人、強奪者などといった人々から成り立っているとすれば、そこには栄光も、誉れも、権能も、喜びもないはずである。しかし、パウロの次の言葉は私たちの心を晴らし、安らぎを与えてくれる。

「あなたがたの中には、以前はそんな人もいた。しかし、あなたがたは、主イエスキリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、洗われ、きよめられ、義とされたのである。」(Iコリント6:11)

これは非常に重要な奥義である。神の王国に入る人々の中には、かつてここにあげたような重い罪を犯したことがある人がいるかも知れない。しかし、今はもうそうではない。汚れた状態ではない。洗い清め、正しいとされているのである。パウロの話聞いた人々はこの卑しむべき罪の状態にあったが、福音を受け入れ、福音の人を清め、変える力によって、彼らはすっかり変わってしまったのである。罪を清める努力を払って、彼らは洗い清められ、第一の復活に出で来たり、神の王国で昇栄する資格を持つに至ったのである。

汚れた人が生まれ変わるときには、習慣を変え、思いを清め、態度を改め、高め、活動を全体的に整え、汚れ、退廃し、神か

## ●神は赦したもう



ら見放されたあらゆる事柄を洗い清める。

同様なことは生活の他の面でも言える。きたなくなった衣服も洗濯し、のりづけをし、アイロンをかければ、もはや汚れ物とは言えない。天然痘も治癒してしまえば、もう感染する恐れはない。罪から洗い清められれば、もはやその人は姦淫をはたらく人とは言えない。罪を洗い清められる過程は、多くの予言者によって、多くの場所で、頻繁に語られている。

罪から清めた場合の効果は著しい。不安な思いでいた人々が平安を見いだしている。汚れた衣はしみひとつなく洗い清められている。以前に罪を犯した人も悔い改めによって罪から清められ、すなわち洗い、清め、漂白され、常時神殿に参入するにふさわしくなり、神の国を受け継ぐ者と共に神の王座の前に立つにふさわしくなるのである。

しかし、あらゆる赦しには条件がある。しっくいはその落ちた箇所を全部覆ってしまうまで塗らなければならない。断食と祈りと謙虚な態度は犯した罪に十分見合うだけのもの、あるいはそれ以上のものが必要とされる。それは「荒布をまとい灰の中にすわる」ほどでなければならない。涙と真底からの改心がなければならない。罪を自覚し、悪を捨て、犯した過ちを正しい権限を持つ主のしもべに告白しなければならない。償いをし、歩調、方向、目的を決める決意を断固として行なわなければならない。自分を取り巻く諸々の条件を調整し、交遊範囲も是正し、変える必要がある。衣を白く洗い清め、神のすべての律法に忠実に新しい生活を始めなければならない。要するに、

自己と罪とこの世のことを克服しなければならないのである。

この心からの悔い改めをして初めて人は主の憐れみを受けることができるようになる。予言者アルマは私たちの罪を清めて下さる主の慈悲に触れて、悔い改めによって罪を清められ、その喜びが「安息」つまり昇栄に通じることについて教えてくれている。

「それであるから、この人々はこの聖なる神権に召されて聖くせられ、子羊（イエス・キリスト）の血によってその衣を白く洗われた。

今やこの人々はすでに聖霊によって聖くせられ、その衣を白くせられ、神の御前に清浄になったのであるから、罪惡を憎み嫌うのを禁ずることができなかった。このように浄くされて自分の神である主の安息に入ったものが非常に数多くあった。」(アルマ 13：11—12)

この聖句は、私たちすべてが求めるべき罪からの清めに対する基本的な態度、さらには、赦しを受けるに値するような悔い改めへと進む上での心構えを示している。以前に罪を犯した人はもう罪に返ることのない地点に到達し、単なる罪の放棄にとどまらず、罪を深く憎悪しなければならない。このような人にとって、罪は非常に不愉快なものとなり、罪を犯したいという思いも衝動もその人の生活から一掃されてしまうのである。部分的であるにせよ、これは「心の清い人」になるという意味であることは確かである。このように主の山上の垂訓、「心の清い人は神を見るであろう」という



汚れた状態から  
清められるとは  
何と喜ばしい  
ことであろうか。

しかし、  
罪を犯さないことの方が  
はるかに素晴らしい  
ことではないだろうか。



教えは、1832年に予言者ジョセフ・スミスを通して与えられた主の言葉に、今は清くない人でも自らを完全にし、清くなることができるという意味を加えるのである。

「故に、汝らの心誠心誠意神に向わんがために、汝ら自ら聖くせよ。さらば、汝ら神を見るの時あらん。そは、神その<sup>まへ</sup>面を汝らに現わすなければなり。而してそは神の時、神の欲するまま、神の旨によりて起るべし。」(教義と聖約88：68)

1833年に、主は再び、完全に悔い改めた人は神を見るであろうと述べられた。これは赦しを意味する。なぜなら、心の清い人だけが神を見るからである。

「誠に、主かくの如く言う。その罪を捨ててわれに來り、わが名を呼び、わが声に従い、わが誠命を守るあらゆる人々は、わが面を見てわれ在るを知ることあらん。」(教義と聖約93：1)

長く熱烈な祈りと心からの悔い改めの後に、罪が赦されたという言葉を受けた時のイノスの状態がこれに当てはまります。

このような寛大な約束を与えられているのに、罪を捨て、主のもとに立ち返るのをためらう必要がどこにあるのか。

最後にひとつ付け加えておきたいことがある。愛と赦しを豊かに注ぎたもう天父に対する驚嘆と感謝のあまり、私たちは、赦しを軽い気持ちで考えたり、悔い改めを言明した後で罪を繰り返してもとがめられることがないのだというような誤った考えに陥らないようにしなければならない。

「われは汝と、汝と共に來りし者たちの罪を赦す。されどこの後汝は再び罪を犯すべからず。わが『みたま』は必ずしも常に人をはげますものにあらざることを忘るな。故に、汝らの罪惡がその極に達するまでひきつづき罪を犯さば主の前より断ち切る。」(イテル2：15)

神の赦しを得られるということで罪を犯した人が陥りやすいもうひとつの誤りは、罪を犯しはしたが、その後で悔い改めの時期を過ぎたので、自分は幾分強い人間になっているという錯覚に陥ることである。これはまったく正しくない。誘惑に打ち勝ち、罪を犯さずに生活する人の方が、誘惑に負けて後で悔い改めた人よりは、はるかによい。生まれ変わった罪人は、自分と同

## ●神は赦したもう



じ罪に陥る人をよく理解でき、そのためその罪人の更生によく力を借すことができることは事実である。しかし、罪を犯し、それを悔い改めることによって、常に義にかなった生活をしている人よりも、強い人間になるということはありません。

神は赦して下さる。私たちはこのことを確信している。汚れた状態から清められるとは何と喜ばしいことであろうか。しかし、罪を犯さないことの方がはるかに素晴らしいことではないだろうか。

私がこれまで述べてきたことから、赦されない罪を犯した場合を除いて、すべての人が赦しを得られるということが明確になったと思う。幸いなことに、悔い改めが十分に行なわれるならば、破門された人も赦される。この破門は、手術のように時には必要なのである。

「されど、その人悔い改めざるときには、その人がわが民を亡ぼすことのなきように、これをわが民の中に数うべからず。われはわが羊を知り、わが羊はわがものとして数えられたり。

されど悔い改めざる者にてても、これを汝らの会堂や礼拝堂より追い出すべからず。何となれば、汝らはかくのごとき者にひきつづき道を伝える義務あればなり。かれらは悔い改めて真心よりわれに立ち帰るやも知れ難し。真心を以てわれに立ち帰らば、われはかれらを赦し、また汝らはかれらを救いに導く者となる。」(Ⅲニーフай18: 31-32)

罪の赦しは、神が人に与えられた最も輝かしい原則のひとつである。悔い改めが神

聖な原則であるように、赦しもそうである。この原則がなければ、悔い改めを求める根拠がないことになる。しかし、この原則があるお陰で、すべての人に対して神聖な呼びかけが行なわれているのである。すなわち罪を悔い改め、赦しを受けなさい、と。

## ホームティーチャーへの提案

1. 赦しの祝福について自分の気持ちを述べる。また家族の人に感じていることを話してもらおう。
2. このメッセージの中で、家族で読んだらよいと思われる聖句や言葉があるだろうか。
3. 悔い改めの段階について話し合う。罪を悲しむ、罪を捨てる、罪を告白する、罪の償いをする、主のみこころを行なう。
4. キンボール大管長の次のメッセージから得られる希望と励ましについて話し合う。「神の王国に入る人々の中には、……重い罪を犯したことがある人がいるかも知れない。しかし、今はもうそうではない。汚れた状態ではない。洗い清め、正しいとされているのである。」
5. 訪問する前に、家長と話し合っておく必要があるだろうか。定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージがあるだろうか。

---

\*この記事は、キンボール大管長の著作「赦しの奇跡」第22章 (pp. 349-71) に若干の変更を加えて、発表されたものです。

# 妻の教会の責任を助ける

ジェラルド・R・シーファー

つい最近、私はひとりの忠実な神権者と、神殿参入のための面接を行ないました。彼に、監督やステーク部長、大管長を支持しているかどうか質問しました。当然のことながら、どの返答も偽りのない、謙遜で力強い答えでした。次に私が、彼が奥さんの召しを支持しているかどうか尋ねました。彼は少し考えてから、支持してい

ると答えました。

そしてこう付け加えました。「これは私にとって、とても難しいことです。これまで私は管理上の重要な責任を受けていましたが、今は解任されました。妻は補助組織の会長をしています。かかってくる電話と云えばすべて妻へですし、指導者会へ行ったりもします。大変な責任だと思います。今



は私が家にいて、彼女が教会の責任を果たす間、子供たちの面倒を見ています。彼女を援助するために私はベストを尽くしているつもりですが、なにせ慣れないことですから。」

それから私たちは、夫と妻がひとつのチームとしてあらゆる面で助け合い、支え合いながら働くことが、永遠の見地から見ていかに大切であるか話し合い、面接を終えました。

教会での責任や奉仕は、男性にも女性にも、大きな達成感を味わわせてくれます。日常の雑事とは違って、教会の責任は霊の糧を与えてくれると同時に、私たちの気持ちを奮い立たせ、活力を与えてくれます。私たちは責任を通して大勢の人々に影響を与え、家庭の外で無私の奉仕をする機会を得ることができます。

思いやりのある夫であれば、妻が教会の責任や活動に喜んで参加できるよう、自分の時間や労力を犠牲にしなければならないことがわかってくるはずです。ところが最近、親しい友人の中にこのような人がいるのを知って驚いてしまいました。彼は活発な教会員ですが、妻に夜の扶助協会の集会に参加させないのです。妻がいなければ自分が子供の世話をしなければならないというのがその理由です。妻にそういう機会を与えようとしなかったり、子供と父親だけの語らいの時間を自ら放棄するようなことは、夫としてつじつまの合った行為とは言えないでしょう。

これとは対照的なある若い夫婦がいました。彼らは別のワード部に引っ越ししました。夫はそれまで青少年のために実によく働いていましたが、今度は成人を管理する責任に召されました。青少年を大切に思い、

良い関係を築いてきた彼が、その責任から解かれたことを知って、私は少々さみしく思いました。ところが彼の奥さんは私にこう言いました。「大丈夫です。夫は今でも青少年のために働いていますわ。なぜって、この私がローレルのクラスで教えているからです。」

この若い夫婦のように考えられたら素晴らしいことです。彼らは、自分たちは一体であり、互いの責任を適当なところで分かち合えることを知っていましたし、良い働きをするには夫婦で互いに助け合う必要があることも知っていたのです。

最近開かれた地区評議会で、ひとりの副ステークス部長が生活の中で経験したことを話し、証を述べました。彼は奥さんのことに触れながら、その時平行して開かれていた補助組織の指導者会で、大切な責任を受けていた奥さんが、十分にそれを果たせるよう祈っていると語っていました。思いやりを示し、祈ることによって妻を支持し、援助している彼の素晴らしい模範に、私は感謝しました。

スペンサー・W・キンボール大管長は兄弟たちに、妻に対して物質的な援助だけでなく、それ以上の助けをするようにと勧告しています。「ペテロは自分の妻を尊ぶように（1ペテロ3：7参照）と教えている。……パウロは、親族ごとに自分の家族をかえりみない者は『不信者以上にわるい』（1テモテ5：8）と述べているが、家族をかえりみるとは、経済的保証と同時に愛に満ちあふれた守りを与えることであると思う。主はこの神権時代の私たちに、『妻たる者は……夫に扶養を要求する権利あり』（教義と聖約83：2）と言われた。『扶養』の中には、食物を与えるだけでなく、愛情を育み、思

いやりを示す責任があることをも含まれて  
いると考える。……

私たちの中には、妻に対して当然とも言  
える思いやりや真心を示していない人がい  
る。食糧貯蔵室は食物で一杯でも、愛と関  
心に飢えている姉妹たちもいる。」

さらにキンボール大管長は教会の責任に  
ついてはっきりと述べています。「兄弟たち、  
私たちの伴侶は素晴らしい助けを与えてく  
れているが、私たちが彼女たちが教会の責  
任をよく果たせるように助けようではない  
か。軽んじてはならない。彼女たちは顧み  
られていない時でも、よく私たちに尽くし  
てくれるのだから。」

また別の折にキンボール大管長は夫と妻  
の協力関係についてこう説明しています。

「結婚をひとつの協力関係として語るなら、  
それは完全な協調であると申し上げたい。  
私たちは末日聖徒の女性に、永遠に続く責  
任を果たすにあたって、無口な伴侶、部分的  
な協力者になってもらいたくはない。どう  
か、献身的かつ完全な妻になっていただき  
たい。」

私が理解する限り、完全な伴侶であるな  
ら教会での責任も十分に果たし、相手から  
助けと励ましを受けることができます。

パウロはこのことを次のように述べてい  
ます。「ただ、主にあっては、男なしには女  
はないし、女なしには男はない。」(1コリ  
ント11:11)

夫と妻はひとつになり、ひとつのチーム  
とし、それぞれがしている義しいことのため  
に互いに助け合い、支え合いながら、昇  
栄に向かって前進していかなければなりませ  
ん。

私たちは、静かな時を選んで妻に愛を示  
し、永遠に彼女の伴侶でありたいとの思い

を伝えることができるはずで。そして、  
彼女の教会の召しだけでなく、人生のあらゆる  
面でどうしたらもっと援助できるかを  
尋ねて下さい。そうすれば永遠に絶えるこ  
とのない報いが与えられることでしょ  
う。



結婚して2カ月後、私はワード部扶助協  
会会長に召されました。後にはワード部若  
い女性会長、そしてステーキ部若い女性会  
長の責任も与えられました。今では結婚し  
て7年になりますが、いまだに管理役員と  
しての責任を果たしています。

教会の中では、夫だけが多くの時間を責  
任に費やしているという型の夫婦がほとん  
どですが、私たちの場合はまったくその反  
対です。しかし私の夫は、不平も言わず、  
自分では古い車を使い、私に性能の良い新  
車を使わせてくれます。また、ワード部の  
訪問や指導者会の司会のために夜家を空け  
る時には、夫が留守番をしてくれます。大  
会で私が話す時には聴衆に混じって聞いて  
くれ、教会の活動のために出る余分な支出  
も喜んで認めてくれています。それに私の  
悩みや関心事にも耳を傾けてくれます。

夫は私が受けた召しを支持することで、  
私への愛を示してくれています。夫とその  
愛がなければ、私は召しを十分に果たすこ  
とはできないでしょう。私は夫が今の責任  
や将来の召しを一層よく果たせるように、  
支持し援助したいと思っています。

# キンボール姉妹の助け

ジャネット・ピーターソン



**5** 番目の子が生まれて 3 週間後に、私の夫は新たに分割されたワード部の監督に召されました。ステーキ部長は面接の中で、私たちの幼い子供たちのことを心配してくれましたが、夫のラリーが主によってこの職に召されたことを強調しまし

た。私の不安は、聖霊からの確証を得て消え去っていきました。

それから数週間というものは、夫が監督になるということがどのようなものであるか経験し、さらには、生まれたばかりのジェフリーが家族の仲間入りを始めて、家族

全員が楽しいながらも忙しきで大変な毎日の連続でした。生まれたばかりの子供を家族に迎え、監督の妻となった興奮状態から次第に落ち着き始めると、私は自分が肉体的にも精神的にもかなり疲れていることに気づきました。することなすことまったく思うようにいかないのです。

カミラ・キンボール姉妹が、私を助けてくれたのはそんな時でした。その年、ブリガム・ヤング大学内のあるステーキ部の扶助協会がキンボール姉妹の講演を予定していて、私は義理の姉にあたるそのステーキ部の扶助協会会長から夫の母と一緒に招待を受けました。キンボール姉妹は、ステーキ部の会員から寄せられていた質問を基にお話をして下さいました。数ある質問の中に「心に傷を受けた時に、どのようにして積極的に問題を克服されたのでしょうか」というのがありました。キンボール姉妹はそれに答えて「ほとんどの場合、私は口を閉ざすことができるようになりました」と率直に語りました。

私は、その言葉に共鳴しました。キンボール姉妹も私と同じような経験をし、伴侶といえども関与することのできない仕事に忙しく立ち働く人を夫とする女性が時として味わう寂しさ、心の痛みを知っていたのです。

キンボール姉妹は、私が聞いていた同じ感情をどのようにして克服してきたのか話して下さいました。また、自分に求められる責任にどう応えたか、また教会で忙しく働き、楽しく生活することの必要性をどうして理解したのかを説明し、それからこう語りました。「教会で一番厳しい仕事は監督

です。」そして彼女は、監督の奥さんたち、特に年端<sup>としは</sup>のいかない子供たちを抱えた人々に向けて、思いやりに満ちた言葉をお話されました。

集会が終わると、私の義理の姉はこの素晴らしい婦人を車の所まで送って行く時に、自分の母親と私をキンボール姉妹に紹介してくれました。人々はもうほとんどいなくなり、私たちはキンボール姉妹の側に近づくことができました。私はキンボール姉妹に、講演会での話心から感謝しており、とても助けになったことを伝えました。そして私は夫が監督に召されてちょうど2カ月が過ぎたこと、また3カ月から10歳までの5人の子供を抱えていることなどを手短かに話しました。

その時キンボール姉妹は私を抱き寄せました。彼女のスピリットと大いなる愛を感じた時に、私は生まれて初めて日の光栄の人物に近く接した思いを味わいました。そして別れ際に、彼女はこう言いました、「それからもうひとつ、あなた自身も御主人同様大切な存在だということを忘れないで下さいね。」

その晩私は生まれ変わったような思いで家に戻りました。どうしたわけか、それからは日曜日<sup>日曜日</sup>を長くて寂しい日と感ずるようなことはなくなって、監督の妻としての自分の仕事の重さに打ちひしがれることもなくなりました。そして私は、主によって監督に召されたこの素晴らしい男性と結婚できたのは本当に素晴らしいことだと思いました。私は見失いかけていた自分の姿を、もう一度しっかりと自分の心に呼び起こすことができたのでした。



# 友人に福音を伝える： グループによる家庭集会

ロバート・L・ハン布林





1961年の11月、私たちはステーキ部指導者会において、デビッド・O・マッケイ大管長から発表があったばかりの個人の会員による伝道を推し進めるよう、当時十二使徒であったスペンサー・W・キンボール長老からチャレンジを受けました。私も他の教会員の模範となるよう、教会員でない友人を自分の家に招待し、宣教師と家庭集会を開こうと心に決めました。

それからふた月ほどして、今度は同じ十二使徒のデルバート・L・ステイブレー長老がキンボール長老の要請を受けて訪問してきました。再び指導者会が開かれ、その席上、私たちはステイブレー長老から、先のキンボール長老のチャレンジに具体的な





行動で応えた人はどれくらいいるか尋ねられました。教会員でない友人に、教会について学んでみる気はないかと話しかけた人は、約50人の出席者中3人しかいませんでした。家庭集会までごぎつけた人はその中でもたったのひとりという有様でした。自分も何もしなかった部類のひとりで本当に恥じ入る思いでしたが、同時に主は私たち一人一人が福音を人々に伝えるよう強く望んでおられるのだなと強く感じさせられました。主はふたりの十二使徒を遣わして、私たちを教え、人々に福音を伝えるという決心をさせようとされたのです。

その晩、私は妻と話し合い、教会のことで話しかけることができそうな友人がどのくらいいるか表に書き出してみました。すると驚いたことに40名近くの名前が出てきたのです。

私たちは、教会員でない人々を宣教師との集会に誘うのをためらわせていたのが、恐れのお気持ちであることに気がつきました。友情にひびが入るのではないかと、自分たちのしていることが知れわたれば、社会で勝ち得たせっかくの良い評判をなくしてしまうのではないかと、もしそうなれば自分だけでなく、教会にとっても不利益になるのではないかなどといろいろ心配していたのです。しかし、それらはすべて無用の心配であることが間もなくわかりました。

私は、友人たちにどう話を持ちかけたらよいかを妻と話し合いましたが、ほかにもモルモンでない夫婦が同席するのであれば、承諾も得やすくなるだろうという結論に達

しました。グループで出席するならば、自分たちだけに目が向けられることがなく、楽な気持ちでいられると考えたからです。それともうひとつ、私たちは以前から、ウィルフォード・ウッドラフが大きなグループごとに教えて良い結果を収めていたことに深い感銘を覚えていました。きっとそれらの集会にはみたまが豊かに注がれ、強い証を受けた人々がすぐさまバプテスマを受け



人の心を変えるのは  
みたまですが、  
教会が真実であることを  
知的な面からも  
納得してもらう  
必要があります。



たいと申し出ることもあったのでしょう。

私たちはふたりでよく話し合った末に、顔見知りであった監督長老のブルース・チャドウィック長老に連絡し、自分たちの計画を話しました。彼は非常に乗り気で、巡回宣教師のデニス・スタグード長老の助けを借りてレッスンを行ないたいと申し出てきました。

一両日して、さらに細かな打ち合わせを



するために、チャドウィック長老とスタダード長老が我が家を尋ねてきました。まず私たちは、レッスンを始める前の15分か20分、皆が打ち解けた雰囲気になれるように、デザートを取りながら談笑する時間をもうけることに決めました。このようにすれば霊的な雰囲気を損なうこともなく、長老たちが望んでいたように、出席した一人一人がそれぞれの家庭にみたまをもたらす影響力を持ち返ることができるだろうと考えたのです。

また、宣教師は教えながら、時々私たちにも意見を聞いたり、合図を求めたりして、もし聞いている人たちがみたまを感じている時は、話題になっている事柄について私たちが証をするようにしました。それから、バプテスマと知恵の言葉のチャレンジは、最後に一人一人と一対一で話し合えるようになるまでしないことにしました。こうすることで、強制的な雰囲気をまったく感じさせず、より円滑に改宗へ導くことができ、バプテスマを受ける確率、活発な会員となる率も通常より高くなります。

レッスンを始める前に、長老たちは早目に来て、私たちと共にひざまずき、みたまの助けを祈り求めることにしました。またレッスンの開会と閉会の祈りは、私が出席した人の中から選んで依頼することになりました。

こうしてやっと、友人たちと集会を持つ準備が整ったのです。私たちは4、5人から成るグループをふたつ作り、ひとつのグループは金曜日の夜、もうひとつは土曜日

の夜という風にして、40人全員をレッスンに招きたいと考えました。

私たちは友人を訪ねる時に、決まり切った話はしないように心がけましたが、大体次のようなステップで進めていきました。

**承諾を得る** 本人は会員ではないが、配偶者が教会員という夫婦を招く場合は、普通は教会で、その会員の方の承諾を得ることにしました。私たちの計画を簡単に説明し、その家庭を訪問して夫婦で出席してくれるようお願いしてもよいか確認をとるのです。時には多少の抵抗もありましたが、そういう場合は、教会員でない方の自由意志を尊重すること、また、もしかしたら考えてもみなかったことが起こるかもしれないということをお話しました。すると大抵の場合承諾が得られました。

**家庭を訪問する** 夫婦がそろって家にいそうな時間を見計らい、前もって予告はせずに訪問するのが一番良いと思いました。普通は2、3分短い話をするところから始めました。

**家庭集會に招く** もう良い潮時になったと思われる頃に、次のように話を切り出しました。「私たちは今度何組かの御夫婦をお招きして、モルモン教会について、勉強する会を開きます。教会の基本的な教えを学ぶのですが、皆さんなかなか面白そうだと言っていて下さっています。モルモン教会、またそのプログラムや教えに関してお持ちになっている疑問について話し合う良い機会です。」そこで、相手の言葉を待たずにこう続けます。「おふたりでおいでになりませんか。



教会にはあまり興味がないとしても、奥さん（または御主人、お友達）が何を信じ、どのように考えておられるのかわかっていただく良い機会になると思います。」

教会の考えを押しつけられたり、バプテスマの約束をさせられたりするのではないかと恐れている人に対しては、次のように言ってその警戒心を和らげました。「もし御自分から教会に入りたいという気持ちになられた時は、私たちも時機を見てそのようにお勧めします。でも私たちは、当の本人が心から望むのでない限り、教会員になるべきではないと信じています。」

**拒絶された場合の対処** 自分の配偶者や友達の宗教について理解を深めることができるというだけの理由では、招きに応じてくれない人もいます。そういう人々がどうして気乗りしないかを話してくれた時は、よく考え、適切な答えをするように努めました。その結果、考えを変えて出席を承諾してくれた人がかなりいました。

宗教にあまり関心のない友達に対してはよく次のように言いました。「私たちは教会員になって、大きな目標を見だし、ひとりの人間また家族がどれほど貴い存在であるかを知ることができました。それがどのようなものか、レッスンに出て直接確かめてみていただきたいと思います。」

どこかの教会に属し、この教会についても何がしかのことを知っているのですが、受け入れ難いと明言する人も中にはいます。彼らの反論にはいつもこう答えました。「主は予言者イザヤに『わが思いは、あなたが

たの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっている』（イザヤ55：8）と言っています。この勉強会はモルモン教会が神のみこころに基づき神の道によって建てられているかを御自分で判断なさる良い機会になると思いますよ。」

幼い子供がいる夫婦、これから子供ができるという夫婦に対してはよくこう言いました。「モルモン教会はあらゆる年齢層、特に子供、青少年、独身者の人々に素晴らしいプログラムを用意しています。私たちは、両親が教会で奉仕し、戒めを守るなら、子供たちも世の悪に染まらず、正しい幸福生活ができるようになる」と信じています。」

ふたりが共に愛し合い、子供を大切にしているのがはた目にもよくわかる夫婦にはこう言いました。「モルモン教会の素晴らしい教えのひとつに、永遠の結婚ということがあります。それは、ふさわしい生活をするなら、夫婦、子供は次の世でも家族として生活できるという教えです。そのことについて学んでみたいと思いませんか。」

このようにして最終的な段階に入ると、いよいよ集会の時間と話し合いのテーマを知らせ、「どうでしょう、おふたりでおいになりませんか」と尋ねます。

私たちは最初、この方法をとって出てきた結果に驚かされました。3分の2ほどの人が招きに応じてくれたのです。最初に作ったリストの内16組の夫婦に話ただけで、それぞれ6名ずつの求道者のグループがふたつできました。そしてそれに会員の配偶者が3、4人、宣教師、私たち夫婦を加え、



各グループは大体13人から14人の構成になりました。

初め訪問した時に断われた人もいましたが、後でまた訪ね、2度目の誘いをしてみました。そしてもう一度勉強会を開くことを話し、それに出てみないかと聞いてみました。私たちは靈感を受けてこの2度目の誘いをしたのですが、何人かの人が応じてくれた時は本当にうれしく思いました。



ひと通りレッスンを  
終えながら、  
初めはバプテスマに  
至らなかつたものの、  
何年も経ってから  
教会員になった人も  
幾人かいます。



私たちが期待したように、これらの集会にはみたまが豊かに注がれ、教会員でない人が胸に強く迫るものを感じているのがその表情に見てとれるほどでした。

普通は、ふたりの長老の内ひとりが前半を、もうひとりが後半を教えるという進め方で、その最中わからないことがあれば、いつでも質問するように促しました。時には質問の答えを翌週まで待って欲しいと頼

んだこともありましたが、彼らはいつもそれを受け入れてくれ、私たちも約束通り必ずそれに答えるようにしました。しかし、ほとんどの質問は、その場で、適格に靈感の導くままに答えることができ、求道者たちも納得してくれるのが常でした。

質問が出た時は、注意を払い、忍耐強く接し、大体は聖書から、時には末日聖典から聖句を引用して答えました。人の心を変えるのはみたまですが、教会が真実であることを知的な面からも納得してもらう必要があります。レッスンに耳を傾け、モルモン経や教会の書物を読み、自分で答えを見いだすことでそれは可能になります。本当に知りたいという気持ちで行なうなら、単に感情的な心の動きとみたまの働きかけの違いは大体よく識別できるようになるものです。ですから私たちには質問にうんざりするというようなことはなく、的確なわかりやすい言葉で、みたまの導きを得ながら答えるようにいつも努めました。質問にはすべて答えましたが、全部が全部即答したわけではありません。求道者がまだ話し合う準備のできていない概念に関する質問や、話し合いをその時のレッスンのテーマからはずれさせてしまうような質問も出ました。そういう時には、即答しない理由を述べ、いずれ答える時が来ることを理解してもらるように努めました。

レッスンを回を重ねるにつれ、私たちはこの教会が真実かどうかを知ろうと学び努める彼らの中に、福音への証がふくらんでいくのを見ました。そして、質問が出尽く



し、みたまによる証を受けたことがわかるまで、バプテスマのチャレンジはしませんでした。その一例ですが、ある人は奥さんと一緒にレッスンをひと通り終えた後で、5度ほど私たちを自分の家に呼びました。その訪問のたびに1時間くらい、私たちは彼から質問を受けて答え、彼はその答えについて深く考えました。最後には質問もなくなり、共に証を得、喜んでバプテスマの勧めを受け入れました。

レッスンはすべて終了し、私たちは全員にこの集会に来てくれたことを感謝し、彼らの家に訪問させてほしいと告げました。2, 3日の内に私たちは長老たちと一緒にそれぞれの夫婦を訪ね、まだ残っていた疑問にすべて答えてから、バプテスマを勧めました。驚いたことに、最初のグループの約3分の2の求道者が受け入れてくれたのです。

それから1週間もたない内に、私たちの成功を知った何人かの教会員が、同じ方法でまたレッスンを行なう予定にいるのかと尋ねてきました。私たちはそのつもりであることを話し、彼らに教会員でない友人を連れてくるように誘いました。そして、何人かの人がこれに応じました。

今度はリストに残っていたすべての夫婦に呼びかけることにしました。そしてまた約3分の2から承諾を得ることができました。最初のグループに出席したもののバプテスマまでに至らなかった人々の家も訪問し、またふたつのグループに分けて話し合いを持つことを話し、出席するように誘っ

てみました。すると、何と全員が出席したいと言ってきたのです。この時はそれぞれ25人近くのグループで、みたまはさらに豊かに注がれました。

ふたりの宣教師の話し合いの進め方はさらに上手になり、質問を受けた時の私たちの答えも総じてより明快なものになってきました。また祈りの中でさらによくみたまを感じとることができるようになり、出席した幾人かは後になって、このレッスンで教えを聞き、みたまを感じるまで、証とはどういうものか本当はわかっていなかったと述懐しました。そしてさらに驚いたことに、出席した約3分の2の人たちが証を得て、長老たちから別に教えを受けていた彼らの子供たち数人と一緒にバプテスマを受けたのです。

この頃にはずっと続けて教えていく心構えができていたのですが、レッスンに誘えるような親しい友人はそれ以上いなくなっていました。それからしばらくして、私たちは30人ほどの教会外の人々と友達になり、前と同じようにしてまた良い結果を得ることができました。その内私たちはアリゾナのツーソンに引越しましたが、ここでも、以前のように30人ほどの友達をつくと、家に招いて家庭集会を行ない、前と同様成功を収めたのです。声をかけた約3分の2の人がレッスンに出、その中の4分の3の人がバプテスマを受けました。この時、私と妻のジェーンはステーキ部宣教師に召されていまして、これらのグループはふたりに教えました。しかし、もし自分たち



が宣教師でなかったとしたら、まだ専任宣教師の力に頼ろうとしていたでしょう。

私たちの招きやレッスンを受けて、感情を害した人はひとりもいませんでした。レッスンを2,3回受けてからやめたいと言う人もいましたが、その数はわずか1割ぐらいでした。レッスンを全部受けた後でバプテスマを受けなかったのはたったの4分の1です。まったく関心を示さなかった人でも、そういう集いに招かれたからという理由で苦情を言ったり、交際を断わってきた例はひとつもありません。

ひと通りレッスンを終えながら、初めはバプテスマに至らなかったものの、5年後、あるいは19年もたってから教会員になった人も幾人かいます。彼らが改宗するまでにはそれだけの時間が必要だったのです。レッスンが全部終了した後で、もし交わりを絶やしていたとしたら、彼らの最終的な決断を遅らせることはあっても、決してその助けになることはなかったでしょう。彼らの幾人かは、我が家での別のグループのレッスンの時も招きに応じて出席し、ある人などは全部で5つのグループのレッスンに繰り返し出席したほどです。まだバプテスマを受けていなくても、教会の良き友人となった人もいます。また今でも時々集いに顔を見せる人もいますし、皆建築基金の獲得に協力したり、教会の何らかの活動に参加しています。まだ教会員にはなっていませんが、ほとんどの人は証を持っていると思います。

私たちのグループ集會に出席して教会員

となった人々の内、約9割は今でも活発な教会員です。そこにはグループレッスンの特異な面が影響を及ぼしているに違いありません。それは求道者たちがお互いの顔を見合わせながら疑問に対する答えを得、またみたまの力を感じ取り、よく祈り、証を得、教会に加わる決心ができるという点です。グループ集會は私たちの友情の絆を強め、長年にわたって証を保ち、教会員として励まし合う上で力となってきました。時には率直な働きかけこそ最善の方法になることを私たちは学びました。

### 話し合いのために

個人または家族でこの記事を読んだ後に、以下の事柄について家族と一緒に話し合うとよい。

1. 教会員でない友人にグループで福音を教える方法には、どんな利点や不都合な点があるだろうか。
2. 友人を宣教師とのレッスンに招いて断われた場合の対処策として、何か役に立つ提案があっただろうか。
3. 友人を宣教師とのレッスンに招いたことのない人、また実際に声をかけてはみたが思わしい結果が出てこなかったという人々は、その壁を乗り越えるためにどのような計画を立てたらよいだろうか。



# ローラの後見人

サラ・E・ヒンゼー



「わたしは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」(ヨハネ10:10)

私は扶助協会の訪問教師の責任をいただいてからもう何年にもなりますが、その間にたくさんの霊的な経験をしてきました。数年前のひとつの経験は、今でも喜びとして私の心に残っています。

数年前、同僚と私は、未亡人のアンダーソン姉妹(仮名)と彼女のふたりの子供を訪問するように割り当てられました。ふたりの子供はどちらも肉体的には大人でしたが、知恵遅れのため家にいたのです。アンダーソン姉妹への楽しい訪問が始まってから数カ月して、私たちは息子さんに会いきましたが、娘さんのローラには会うことができませんでした。私たちはローラがひどく内気なことを知りました。ローラはだれか人が来るのに気づくと、自分の部屋に行ってしまうということでした。

ある土曜日の午後、私は扶助協会のセミナーに出席した後で、月初めに訪問したものの留守でいなかったアンダーソン家に立ち寄りとう決心しました。セミナーでひとりの人の話に強く心を動かされたからです。その人はこう言ったのです。「皆さんは訪問をする時、担当の姉妹に仕えるために心から努力しているのでしょうか。それともただ毎月訪問済みの印を付けるために訪問しているのでしょうか。」この言葉に私は強いショックを受けました。というのも、アンダーソン家族を訪問するようになって数カ月になるのに、私たちはローラのことを知ろうと心から努力していなかったからです。私は心の中で、ローラが家において、彼女と

話す機会がありますようにと祈りました。

呼びりんを鳴らすと、アンダーソン姉妹が出て来て、居間に通して下さいました。それからすぐアンダーソン姉妹は、ちょっとすみませんと言って、ストーブの上のものを見に行きました。その部屋にローラがいたのです。足載せ台に足を載せて、揺り椅子に腰かけていました。

最初、ローラは私を見て大分驚いたようでしたが、私がかがんで彼女の足のことを尋ねると、落ち着きを取り戻しました。

聖霊が私の心に静かに働きかけてくるのが感じられました。そして、私は心に思い浮かぶままにローラに話しかけました。「あなたに扶助協会に来てもらえたらと思うのよ。あなたの美しい心に触れられたらみんなどんなに喜ぶかしら。」

するとローラはこう答えました。「私も行きたいの。でも私の足大きいから、もう何カ月も靴がはけないの。歩こうとするととても痛い。」

私は再び彼女の足に目をやりました。確かにローラの言う通り大きいのです。その時私はわかりました。ローラは教会へ行くにしてもどこへ行くにしても、人の助けなしにはほとんど動けなかったのです。

その時みたまがささやきました。「彼女の足の問題はあなたの問題です。あなたはその問題をどうするつもりですか。」

「医師の所へ連れて行くべきかしら？」と私は思いました。するとみたまが、「そうです、今連れて行きなさい」とせき立てました。

「今すぐ？」私は思いました。

「そうです」とみたまはささやきました。



は再びほえみしました。私はみたまが彼にも働きかけていたことがわかりました。

ローラは手術を受けました。そして万事うまくいきました。同僚と私は翌日病院にローラを見舞いましたが、ローラは本当にうれしそうな様子でした。ベッドから起きてその辺りを歩き回り、これからは動けるようになるという希望に胸を躍らせていました。

ローラの足の快復は速く、包帯がとれて、望み通りどこへでも行けるようになるまであまり長くはかかりませんでした。それまで私たちはほとんど毎週、ローラの様子を見に彼女の家を訪ねていました。ある朝、ローラと話していると、みたまがささやきました。「彼女の足はよくなり、歩けるようになりました。今度は何か意味のあるものを見つけて時間を過ごせるように助けてあげなさい。」

私はこのささやきに驚きはしませんでした。主はこれほどまで、私たちが互いに励まし合い、助け合うように望んでおられるのかと思うと、いささか圧倒されてしまいました。

私はアンダーソン姉妹とローラのことについて話し合いました。彼女は私が心配していることをうれしく思ってくれたらしく、私に助けを求めました。私は祈ってから、自分が受けたみたまのささやきについて訪問教師の同僚や私の夫と話し合いました。それから私たちはこの新たな責任に応えるために、いろいろなことを調べました。

近くの町に障害者のための特別な学校があり、心理学者の夫は私たちに、そこで働いている自分の友人に援助を求めてみては

と勧めてくれました。この友人はローラと私に学校で会うことを約束してくれました。

約束の日の午後、ローラを迎えに行くところ、母親はその日のために新しい服を用意していました。シンプルで質素な服でしたが、ローラにはとてもよく似合っていました。ローラは落ち着かないようでした。彼女にとって特別な、新しい冒険に乗り出す日なのでですから無理ありませんでした。ローラは自分が学校でうまくやっているか自信はなかったものの、学校に入りたいと心から願っていました。

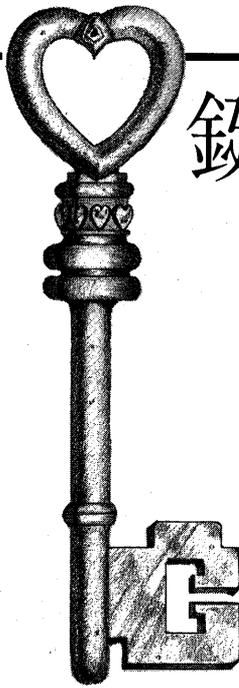
学校側はローラを丁寧に扱ってくれました。学校の中を案内され、授業と実習から成る2部制のプログラムについて説明を受ける時のローラは興奮気味でした。ローラは実際に働いてお金を得ることができるのです。ローラにとって、ほんの数カ月前までは夢にも考えられなかったことでした。

書類に記入するため机に向かうと、校長先生はこのように言われました。「ヒンゼーさん、ローラを私共の学校にお迎えできてうれしく思います。彼女の進歩状況をお知らせするためにこの用紙にあなたの名前と住所を記入していただけますか。ところで、あなたのことですが何と書けばよいでしょうか。友人？ 扶養者？ 後見人？ そうですね、後見人とお呼びすることにしましょう。ローラの後見人と。これでよろしいでしょうか？」

感謝の涙が目にあふれました。「後見人、それでよろしいですわ。」

愛が

鍵でした。



ジェーン・ラリー・ロビンソン

**夫**のハワードは立派な末日聖徒の血統の出でした。両親とも、献身的な開拓者の家族の末裔で、父方の祖父も母方の祖父も、1879—80年にかけてサンワン河地区への道を探索するために召された人でした。

ハワードの父親は、1927年に家族共々ユタ州のパラゴナからコロラド州西部の高原へと移住しました。そこは羊を飼うにはよい土地でしたが、町へ出るには50マイル以上もあり、末日聖徒のワード部はありませんでした。

ハワードも彼の兄も、早くから働くことを学びました。働きづめに働き、家族や教会から遠く離れて、苛酷な自然、寒さ、文明から隔絶した環境の中で生きることを学んだ彼らは、自己の力を過信するようになり、福音の証を培うことをしなくなって

しまいました。そうして、ふたりは宗教など必要ないと考える、自負心の強い青年に育っていったのです。

ハワードと私は、1938年、16歳の時に知り合いました。彼は「モルモン教会の一員」でしたが、私は4年の後に彼と結婚しました。それから6年の内に3人の子供に恵まれましたが、しばらくして私は宣教師の訪れを受けました。そして、私も「モルモン教会の一員」になったのです。私の生活に大きな変化が生じました。私は何年かの間、真実の福音を捜し求めていました。ですからそれを見出した時には、もう全身全霊で受け入れたのです。私は私の家族に福音への信仰を教えようと決心しました。そして、夫はもちろんのこと、家族全員を改宗しようと努力しました。子供たちも教会の中で育てました。

でも、家族は私に背を向けました。それは私にとって、とても大きな試しでした。しばらくして近くに教会の小さな支部ができましたが、夫は無関心で、いらいらした様子さえ見せるようになりました。私はと

言えば、初等協会や日曜学校で働くのが楽しくて、当時は5人になった子供たちを連れて通いました。でもワードは私が教会に行き過ぎることに腹を立て、鬱憤を私にぶちまけました。私は裏切られたように感じ、そろ恐ろしくなりました。どうしたら家庭の和を築くことができるのか、途方に暮れてしまいました。

ある日のことでした。私は心がひどく乱れ、孤独に引きずり込まれるような気持ちで、草原の方へ歩いて行きました。泣きながら、干草の山のそばにひざまずいて、私は自分の問題について一心不乱に天父に祈りました。長い時間が経った後で、はっきりとした祈りの答えが与えられました。「夫を愛しなさい。」

それは、私が期待した答えではありませんでした。私は考えました。「私は彼を愛してきたわ。できることはみんなしたわ。」家へ引き返す途中、私はその祈りの答えを頭から振り払おうとしましたが、できないことを覚りました。

その後、私は再び祈りました。「どうしたら、天のお父様、どうしたら主人に愛を示すことができるのでしょうか。」遂にまた答えがやって来ました。「批判してはならない。敬いなさい。ほめてあげなさい。よく話し合いなさい。あなたの証を述べなさい。」

私は自分がどんなに間違っていたかに気付かされました。それまでずっと、私はあらゆる捜しばかりして、いらいらしていました。ワードをほめたことはあまりなく、自分の本当の気持ちを話したこともなく、ぶりぶりしてばかりいました。自分にとって救い主がどれほど大切な存在か、私が福音についてどう感じているかなど、主人に話したことは一度もなかったのです。

やっと、私は自分が変わらなければならないことを覚りました。道はひとつしかありません。みたまが毎日私を励ましてくれました。2, 3日して、私は初めて私の証を主人に伝えることができました。主人は聴いてくれました。私の心に勇気が湧いてきました。私は子供たちにも応援を頼み、みんなで心を合わせて祈りました。それから、ワード部の神権指導者にも頼みました。彼らも力を貸してくれました。

みたまの助けによって、ゆっくりとではありましたが、変化が起こり始めました。ワードは、子供たちや私が参加するいくつかのプログラムに来てくれましたし、時々教会にも足を運んでくれました。親の出席のないままに、4人の子供たちは神殿で結婚しました。それから、5番目の子供が婚約し、私たち夫婦に、自分と一緒に神殿に入れるよう一年間準備してくれるようにと言って来たのです。

ワードはできるかどうかわかりませんでした。とにかくそれをふたりの目標にしました。そして、結婚35日目にして、私たち夫婦は神殿に入ったのです。5人の子供たちとその結婚相手、そして私たち夫婦は共にプロボ神殿に参入し、家族の結び固めを受けました。何と素晴らしい、霊的な、楽しい日だったことでしょう。

以来、ワードはスカウトマスター、長老定員会会長、副監督、ホームティーチャーなどの責任を受け、今は大祭司グループリーダーとして働いています。ワードは、彼を知るすべての人から愛され、尊敬されています。私は、あの遠い昔、心を傾けて祈った時に与えられた答えをどれほどありがたく思っているか、とても言い表わすことができません。「夫を愛しなさい。」

# 批判から改宗へ

ジョセフ・W・ダーリング

**私**が末日聖徒イエス・キリスト教会を知ったのは、北アイルランドのベルファストで開かれたある土曜日の夜のダンスパーティで、ひとりの若い女性と知り合ったのがきっかけでした。そして翌日の夜にデートする約束を取りつけたのですが、考えてみるとその日は日曜日で、私は初めてこの教会の集会に出席することになったのです。しかし私はプロテスタントの教育を受け、ふたつの教派の教会で活動しており、末日聖徒にはあまり共鳴するものはありませんでした。

私は街頭で伝道している長老たちに親しげな態度を見せながら質問攻めにして困らせたり、ジョセフ・スミスが真実の予言者かどうかについて彼らと議論したりしました。その女性に関心があったためだと思いますが、私は末日聖徒イエス・キリスト教会の集会や社交活動に参加し続けました。しかし、ジョセフ・スミスに神権が授けられたことは、かたくなに否定し続けたのです。

ちょうどその頃のことです。ある晩の聖餐会で、その日の朝着任してきたばかりの若い長老が証をするように頼まれました。彼は旅をしてきたせいか、髪は少し乱れ、疲れた様子が見えました。彼は立って証を始めましたが、言葉にはドイツなまりがあり、私は、教会はよくこんな頼りない宣教師を送ってきたものだと思います。

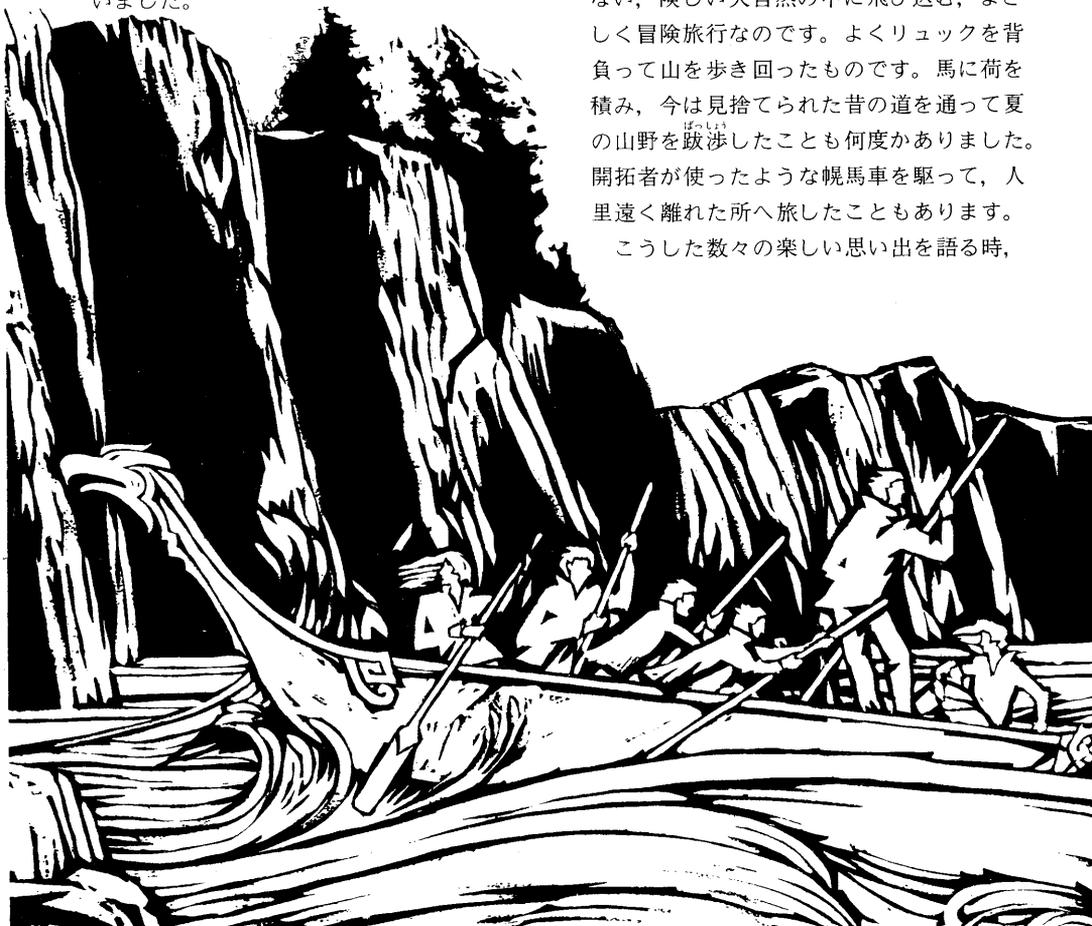
この長老は簡単に、そして謙遜な態度でジョセフ・スミスの物語を証しました。しかし彼のほほに涙が伝うのを見た時、私は何のためらいもなく彼の証を信じ、共に涙を流していました。ベルファストのヘレンズ湾で私がバプテスマを受けたのは、それから間もなくのことでした。

# 失敗したら赦してくれ!

ティーダ・ウッドード・ファンズワース

**私**の父は長い間、神の存在を認めていませんでした。それでも神の創造の業である素晴らしい自然をこよなく愛していました。

毎年夏になると私たちは家族で旅行をしました。とは言ってもにぎやかな行楽地にはありません。人間の甘えなど一切通用しない、険しい大自然の中に飛び込む、まさしく冒険旅行なのです。よくリュックを背負って山を歩き回ったものです。馬に荷を積み、今は見捨てられた昔の道を通して夏の山野を跋渉ばんしやうしたことも何度かありました。開拓者が使ったような幌馬車を駆って、人里遠く離れた所へ旅したこともあります。こうした数々の楽しい思い出を語る時、



必ず思い出すが、ピュージェット・サウンド（米国ワシントン州の太平洋岸にある湾）で体験したあの夏の日の出来事です。

丸太を巧みにくり抜き、へさきに動物の頭の像を高く掲げた長さ9メートルほどのカヌーが、その夏の私たち家族の住まいで、それを操ってあちらこちらと旅をしました。顔は真っ黒に日焼けし、まるで原始人のような楽しい毎日でした。

この旅も終わりに近づいたある時、私たちはカヌーを砂浜に引き揚げると、体を砂の上にくったりと横たえ、時の経つのも忘れて休んでいました。ところが突然、もう少し旅を続けてほかの所へ行ってみようという考えが、だれからともなく出てきたのです。日は大分西に傾いていましたが、皆それに賛成でした。全員カヌーに乗り込み、眠りたい者のためには毛布を敷き、湾の対岸目指してこぎ出しました。カヌーはかなりの幅があり、船べりにはオールが備え付けてありました。各自はオールを持ち、昔のガレー船の奴隷のような格好でカヌーを進めました。私たちはそれから先どういうことになるのか何も考えず、のんきに構えてカヌーをこいでいましたが、間もなく潮の流れの激しいことに気がつきました。カヌーがものすごいスピードで岸から離れて行くのです。速い潮流に捕らえられたカヌーはたちまち湾の外に向けて流されました。蒸汽船に乗って船長をしたこともある父親は迫り来る危険を察知しました。嵐が来ていたのです。それも暴風雨が。

父は少しでもカヌーが揺れないようにするため、母とふたりの子供を座らせると、「さあ、お前たち4人（私と兄とふたりの

妹）でこぐんだ。だが、最後のひとふんばりの時に使う力だけは残しておくんだ。」

間もなく嵐が襲ってきました。波は次第に高くなり、夜の闇が迫っていたために、はるかに見える丘陵の姿は一層かすんできました。何としてもそこにこぎ着けなければならぬのです。父はあわ立つ大波の中を巧みにカヌーを操りました。横波をひとつ食らっていたら、転覆は間違いありませんでした。

私たちはなおこぎ続けましたが、辺りはすでに夜の闇が覆っていました。だれもひと言もしゃべりません。風と波しぶきが顔を激しくたたきました。私たちはオールを波に捕られて、海のもくずとにならないよう、十分注意しながらこぎました。

私たちはひたすらこぎ続け、手足は棒のようになってしまいました。しかし手の動きを止めるわけにはいきません。私の腕は感覚を失って、オールを動かすだけの機械と化していました。

風を突いて父の声が聞こえてきました。「大丈夫か！」

「大丈夫」と答えを返すと、また闇の中を風と波に向かって続けました。

それからどの位の時間が過ぎたでしょうか。風と波のうねる音にまじって、波が岩に当たって碎ける音が聞こえてきました。そして、目指してきた断崖の黒い影がぼんやりと見えてきたのです。私たちは岩に碎け散る波の音だけを頼りに進みました。さかまく大波の中に引き返せば、転覆するしかありません。くずれ落ちる高波の間をぬって力の限り速く進まなければなりません。しかし、前進するといっても、そ

の先がどうなっているのか見当もつきませんでした。その頃までには目も大分暗闇になれていましたが、断崖の下がどういう地形になっているかまでは見分けることはできませんでした。それでも私たちは断崖の黒い影を目指して進みました。

その時父が口にした言葉は今でもはっきりと覚えています。「これで失敗したら赦してくれ。成功の確率は万にひとつだが、チャンスはこれしかない。準備はいいか？」

「大丈夫！」

私たちは不気味な黒い影をそびえさせる断崖目指して、まっしぐらにこぎ進みました。前に何が待っているかなどは考えもせず、腕も折れよとばかりにこぎました。そうこうしている内に、急にカヌーの向きが変わりました。

「オールを引っこめろ！」と父が叫びました。

素早くオールを引き入れると、砂が舟底に触れる柔らかな感触がありました。カヌーは舟底を砂浜にすりつけて停止しました。強い風が顔に吹きつけていました。見上げると、手も届かないはるか上の方で、風に吹かれた木々がヒューヒューと音をたてていました。

私たちは、打ち寄せる大波にカヌーが上下に揺れるほかは、何も感じませんでした。しばらくは、だれも何も言いませんでした。そして父が放心したように言ったのです。

「神は本当にいるんだ。」

私たちは夜明けまでそのままのままでいるしかありませんでした。疲労困憊した私は眠り込んでしまいましたが、父と母は朝まで一睡もしませんでした。潮の流れはおさまっ

ていたでしょうが、私たちは相変わらず危険な状況にあったからです。

翌朝目を覚まして初めてわかったのですが、私たちのカヌーは断崖にできた狭い裂け目のような所に入り込んでいたのです。幅はカヌーがやっと入れる位しかなく、どっちを見ても岩で囲まれていました。父の判断やオールを操る手元に少しでも狂いがあったら、だれも生き残ってこの話を人に伝えることはできなかつたでしょう。何キロメートルにもわたって険しい断崖が続くその海岸線で、このような裂け目はほかに一箇所もありませんでした。

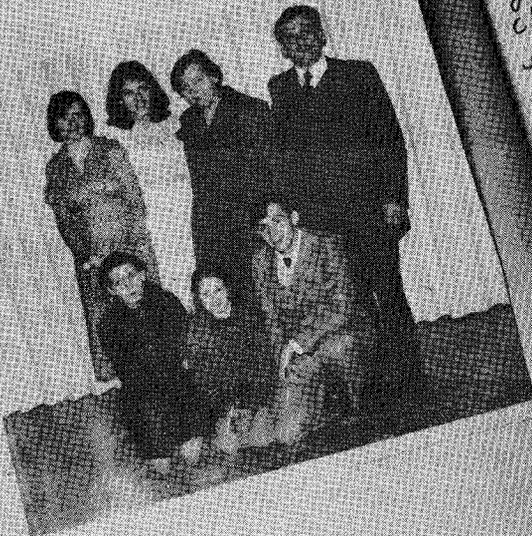
荒狂う闇の嵐の中を木の葉のようにもまれながら、ちょうど入り込める大きさの、しかもたったひとつしかない避難所にまっすぐたどりつけたというこの事実を考える時、天父の助けがあったと言う以外に、ほかにどのような説明もあり得ないことがわかります。

この出来事をきっかけに、私の家族は真のイエス・キリスト教会を探すようになりました。そして長い年月の末に、私と母と妹たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となることができたのです。父もジョセフ・スミスは真の予言者であると信じるようになりましたが、バプテスマを受けないうまま亡くなってしまいました。

これまでもピュージェット・サウンドでのあの夜の出来事は何度も何度も脳裏に浮かんできましたが、その度に畏敬の念を新たにしています。あわをたてて荒れ狂う闇夜の海の中で、頼るすべをまったくなくした時に、父は神が天地を治めたもうことを知ったのです。

# 予期せぬ収穫

グラデイス・C・ファーマー



Notre famille toute  
est heureuse de vous offrir  
nous traverser l'histoire  
famille partant de  
Jerusalem et guidés  
jusqu'au continent  
c'est l'histoire de leur  
et de leur relation  
Nous vous témoignons  
contient la parole  
les principes qui y  
nous ont unifiés de  
témoignons que  
Jesus Christ est  
le rédempteur de  
l'Église et que  
dieux et que  
deux et que  
9

私は1965年にフランスでの伝道を終えて帰環しましたが、1978年の冬に同じワード部のマリアン・リーム姉妹が宣教師としてパリに行く時まで、フランスに召された宣教師に会ったことは1度もありませんでした。私は何度か彼女に励ましの手紙を書き、彼女からも伝道が進んでる様子

を伝える絵葉書をもらいました。

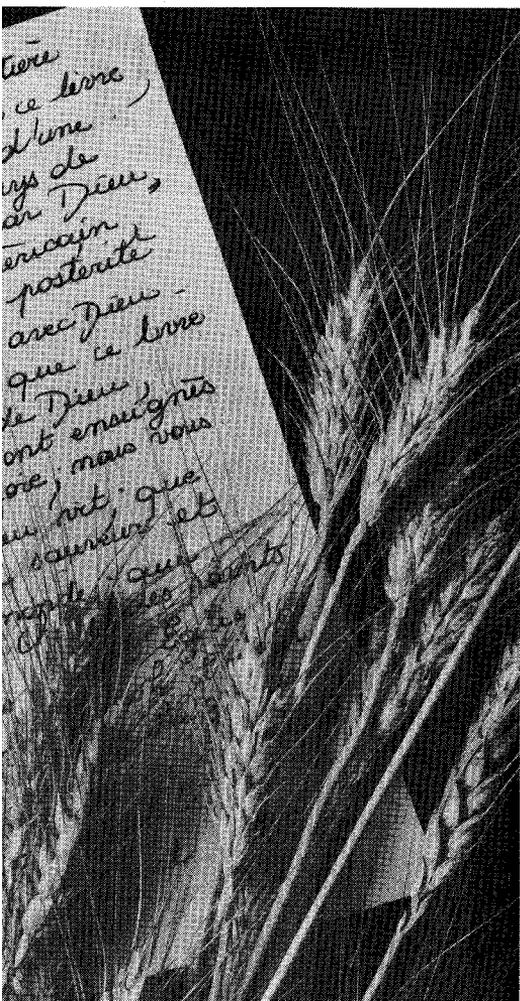
翌年の夏、彼女から来た手紙を開けて、私はびっくりしました。一体どこで手に入れたのか、1964年にベルサイユで伝道中の私と同僚の写真が同封されていたのです。

その手紙にはこう書いてありました。『グラディス姉妹、先週面白い経験をしました。私たちはデイマール家を訪問し、その家族が私たちのために準備してくれた特別なモルモン経を受け取りました。デイマール姉妹は私が教会員になって長いことを知ると、椅子にのぼって、壁から1枚の写真を入れた額を外し、そこに写っているひとりを指して、この人を知らないかと尋ねてきました。私は2,3分見てから、『はっきりは言えませんが、アメリカで私と同じワード部に集っているファーマー姉妹のような気がします』と言いました。デイマール家の人々は、私とその写真の宣教師を知っているかも知れないというのでとても喜びました。デイマール姉妹は目に涙を浮かべながら、自分が教会に入ったのはその宣教師の証があったからですと言いました。

姉妹は前から、いろいろな宣教師に、その写真の宣教師がだれでどこにいるかを聞いていたということでした。』

リーム姉妹がさらに書きつづるところによると、デイマール兄弟という人は姉妹のバプテスマから数カ月して教会員となり、今は第二副監督をしているとのことでした。

しかし私は面食らってしまいました。そ



の活発なフランス人家族がどのような人々で、また特に奥さんの改宗に私が大きな力となったということにもまったく思い当たる節がなかったのです。フランスで私が教えたり、バプテスマに導いた人々の中では覚えのない家族でした。私はもしかしてと思いながら、伝道中につけていた小さな日記を開けてみました。そして1964年の夏の頃の箇所にデイマール家族について書いた部分を見つけたのです。

「7月8日、デイマール家の奥さんに約束の初めてのレッスン。」

「7月9日、デイマール家の御主人と初めてのレッスン。なかなか難しそうな人。」

記憶がよみがえってきました。家族の顔こそ思い出せませんでした。家の様子がほんやりと頭の中に浮かんできました。その時の私の新しい同僚はまだフランス語が話せず、私は苦勞しながらひとりでレッスンを進めました。12のレッスンの内、4つまでは進んでいたのですが、その家の御主人が私の言葉の一つ一つに突っかかってくるのです。がっかりする同僚に、話を聞きたいと言う人がすべて福音を受け入れる備えができていたとは限らないと言いながら、その家から帰った時のことを思い出しました。

「7月21日、戸別訪問を7時間行なう。デイマール家を訪問、奥さんは信仰のある素晴らしい人。」

「7月26日、アメリカ人支部で伝道プログラム。お休み会員と、デイマール家を訪問。」

「7月29日、デイマール家でレッスン。こ

れ以上訪問しても無駄のような気がする。」

家族の中のひとりだけが福音を受け入れる気持ちを持っているが、ほかの家族たちの反対が強いために、宣教師がバプテスマのチャレンジを受け入れる準備のできた他の人々に移っていかざるを得ないというケースはよくあります。デイマール家の場合もそうでした。

私の元に郵便で1巻のテープが送られてきました。中には改宗までの道のりを語るデイマール家の人々の声が吹き込まれていました。

私が最後の訪問をしてから1カ月ほどたったある日、デイマール姉妹はくつを磨きながら、兄弟と福音のことを話していました。兄弟は前と同じように、モルモン経を受け入れる様子は少しも見せませんでした。彼女は心の中で、「私にはわからないけど、家族がモルモン経が真実であることに気付く日がいつか来るかも知れない」と思いました。その時突然、彼女の耳にモルモン経が真実であると証する私の声が聞こえてきました。最初は恐れを感じましたが、それはたちまち大きな安らぎと喜びに変わりました。それから何週間か彼女はその時のことを幾度も考え、みたまの証を感じました。

それから時は移り、デイマール家は同じベルサイユの別の所に引っ越しをしました。私との出会いから6年たった1970年、ふたりの長老がデイマール家を訪ねました。姉妹が彼らに最初に話したのは、何年も前の姉妹宣教師の訪問と、その後で経験した霊的な出来事でした。長老たちはそれは聖霊の証であると説明しました。姉妹もそれが

真実であるという確信と、教会員になりたいという気持ちを話しました。しかし彼女のバプテスマは、デイマール兄弟の心が変わるまで待たなければなりませんでした。

デイマール家の娘さんが盲腸炎になった時のことです。デイマール兄弟は職場から病院へ真っ直ぐ駆けつけました。ところがあるのは子供だけで、姉妹の顔が見えないのです。家に帰るとデイマール姉妹はふたりの宣教師と話をしていました。彼は怒りをあらわにしなが、宗教のことを心配する前に、もっと娘のことを心配したらどうかと言い、ひとりの宣教師の聖書を引き裂いて、窓の外に投げ捨ててしまいました。そして彼女を病院に連れて行き、付き添いをさせたのです。

次の日、デイマール姉妹は、「宣教師がお金持ちでないことは知ってるはずでしょう。自費でこの国に来ているのよ。聖書の方だけは弁償して下さるわね」と強い口調で夫を責めました。デイマール兄弟は宣教師の所を訪ね、破いた聖書の弁償をしましたが、もう2度と家には来て欲しくないと言いました。

しかし、何カ月かたつ内に彼の心も和らぎ、デイマール姉妹がレッスンを受けるのを許すようになりました。そして1971年、デイマール姉妹は上の3人の子供と一緒にバプテスマを受けたのです。兄弟の方も教会に顔を見せ、悪い習慣をやめるようになり、1972年ついにバプテスマの水をくぐりました。彼は後に、聖書を破った宣教師に手紙を書きました。伝道中あまりバプテスマの機会に恵まれなかったその長老は、記

念の品々の中にあの破れた聖書を入れて、すでに故国に帰環していましたが、この思わぬたよりに読んで、喜びに涙しました。

デイマール兄弟は、伝道の仕事は本当に大切に、決して失望してはいけないとすべての宣教師に訴えたいという言葉でテープの話を結んでいました。デイマール兄弟はある時、私が写っている写真を持つ会員を見つけ、それをもらおうと額に入れて居間の壁に掛け、ベルサイユに新しい宣教師が来るたびに、写真の中の宣教師を知らないかと尋ねていたそうです。

またデイマール兄弟は、自分の「土地」はあまり肥えていなくて、育つのも、実をつけるのも大分かったが、福音の種をまいてくれた私にいつも心から感謝していると、家族も一人一人、感謝の言葉と私の上に主の祝福があるように祈っていると言っていました。

私は心に熱いものを感じながら、そのテープを聞き終え、一緒に送られてきたフランス語のモルモン経を開いてみました。中には一人一人の証を添えたデイマール家の人々の写真が入っていました。彼らはそうして、自分たちの国の多くの人々に証を伝えていたのです。

涙がほほをつたいました。私のまいた種が長い年月の後に実を結んだのです。ことの始まりはモルモン経への私の証でした。それがいつ実を結ぶかはだれにもわかりませんでした。私たちの行ないが他の人にどう影響することになるか、それを言うことはだれにもできません。



# ちい とも 小さなお友だちへ



ナヒードは、朝ごはんのラシー(バターミルクとサトウキビのしるをまぜたもの)をごくんとのみました。ほんとうは、朝ごはんなんかほしくありません。なぜって、きょうは生まれてはじめて学校へ行くんですもの。おねがわくわくして、ごはんどころじゃないんです。

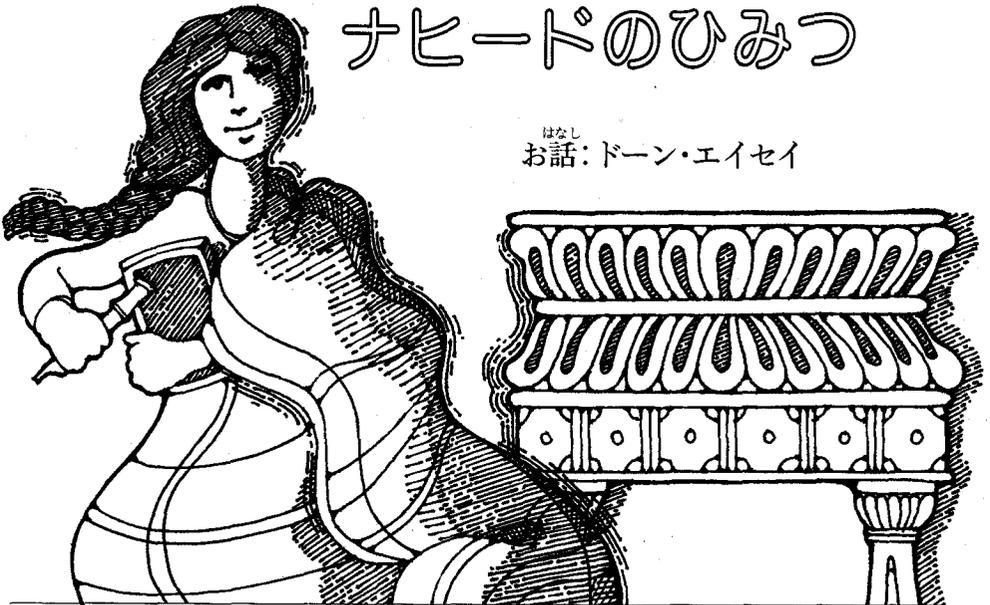
ナヒードは、もうすぐ11さい、ずっとずっと前から、学校へ行きたい、学校へ行きたいと思っていました。でも、ナヒードのすんでいるパキスタンの小さな村では、女の子が学校に行くなん

て、すごくめずらしいことでした。ナヒードは、ゆうびんきょくへ行って、代書係のアリ・ムジュバルが字を書くのを見るのがすきでした。代書係というのは、字が書けない村の人たちのかわりに手紙を書いてあげる人のことです。それにナヒードは、ムジュバルが手紙のへんじを村の人たちに読んでやるのを聞いていたのもすきでした。

アリ・ムジュバルは手紙の代書をたのんでくる人に、まず、「だれに出すのだね」と聞くのです。そして次に「どこへ出すのだね」って。それからムジ

## ナヒードのひみつ

はなし  
お話：ドーン・エイセイ



ユバルは竹のペンをとって、ペン先をしらべます。そしてそのペン先を大きなインクのビンにひたしながら、村の人が手紙に書いてもらいたいと思っ  
ていることを、よーく聞くんです。それから、紙の上にサラサラと字を書きはじめるんです。

ナヒードは、アリ・ムジュバルがきれいな字を書くのを、目をこらして見ていました。ナヒードは、ペンが紙の上を走る音がすきでした。それに、インクのおいや、村の人たちのものうげな声もすきでした。せかい中のどんなことよりも、ナヒードはあのふしぎな読み書きをならいたくてしかたがありませんでした……そう、そうです。ナヒードはきょうそれをならいはじめ

るんです。「わたし、すぐにアリ・ムジュバルみたいになれるわ。」ナヒードはいいました。

それを聞いておにいちゃんのバシールは、わらいました。バシールは、前に学校へ行ったことがあるんです。でも、畑ではたらかなければいけないので、お父さんがよびもどしてしまっ  
たんです。「字をならうって、やさしくないんだぜ。」バシールはいいました。でも、そういいながら、ねん土板や竹ペンをよういしてくれました。

しばらくして、ナヒードはねん土板と竹ペンをもって、出かけました。

「クダ・ハフィズ（神さまがまもつてくださるように）」ナヒードがバンヤンの木のしげみの方へ歩いて行くと、お田さんが大きな声でいいました。

生徒たちは、バンヤンの木かげで、先生からいろいろなことをならいます。小さな村ですから、学校のたてものはありません。だから、はれた白しが学校はないのです。雨がふり出したら、生徒たちは、走って家へかえります。

ナヒードは、ぶらぶら歩きながら、家へかえりました。アリ・ムジュバルが知っていることをみんなおぼえるには、いったい何日あのバンヤンの木の下でべんきょうしなければいけないのでしょうか。ナヒードの頭の中は、これからのことを考えて、くるくるまわっていました。「読み書きなんて、こんなむずかしいことができると思っ  
ていて、わたしばかりだったわ。お田さんだって、わたしが家のでつだいをしたらよろこぶし、だいい、学校に行くなんて、時間  
のむだだわ。」

お田さんは、にわのかまどのそばで、夕ごはんを食べるチャパティを作っていました。お田さんは、ナヒードを見るとき、にっこりわらっていました。「学校はどうだった。」

ナヒードはかたをすくめて、かぞくのへやにねん土板と竹ペンをおきに行きました。

ナヒードがにわに出て来ると、お田

さんはしんぱいそうに、またたずねました。「<sup>がっこう</sup>学校はどうだったの。」

「<sup>かあ</sup>お田さん、わたし、アリ・ムジュバルみたいには書けないわ。アリ・ムジュバルは<sup>てがみ</sup>手紙にすつごくたくさん<sup>じ</sup>字を書くけど、わたし、ひとつだって書けないんだもの。」

<sup>かあ</sup>お田さんは<sup>て</sup>手をやすめて、じっとナヒードの<sup>め</sup>目を見えていました。そして、しずかにこういいました。「ナヒード、<sup>おんな</sup>女のしごとは、たいていすぐにおぼえられるわ。おぼえるのに1時間かかるしごともあれば、1日かかるしごともあるけど、でもまあやさしいわね。お田さんがナヒード<sup>とき</sup>くらいの時には、そんなしごとしかならわなかったわ。女の子は<sup>がっこう</sup>学校に行かれなかったのよ、でも、あなたはことばや、ことばのすばらしさを<sup>し</sup>知ることができるの。でもね、ことばのすばらしさは、すぐに<sup>じぶん</sup>自分のもの<sup>に</sup>することはできないわ。……一日<sup>いちにち</sup>くらいではとてもむりね。」

ナヒードはうつむいていました。お田さんのいうことは、ほんとうでした。



<sup>がっこう</sup>学校に行けばその<sup>め</sup>目のうちに<sup>なん</sup>何でもわかるようになるなんて<sup>おも</sup>思っていたのはたいへんなまちがいだったのです。ナヒードは<sup>かあ</sup>お田さんのそばをはなれて、<sup>むら</sup>村のまん中の方<sup>ほう</sup>へスキップして行きました。なんだが、<sup>こころ</sup>心<sup>が</sup>かるくなってい

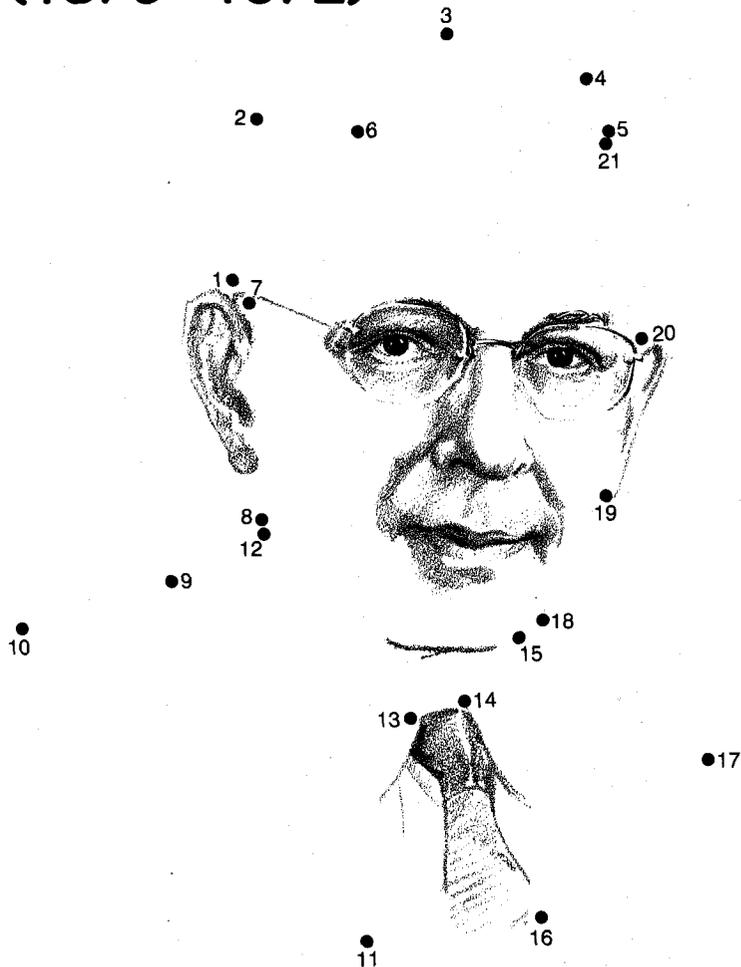


ました。「わたし、できるわ。きつとで  
きるわ。」ナヒードはうきうきしていま  
した。

ふと見ると、村の男の子たちがピル  
カウディ（地面に線（せん）をひき、そこから  
出ないようにして、おにがほかの子ど  
もたちをつかまえるゲーム）をしてい  
ました。そこへ、お田（かあ）さんがほかの女  
（おんな）のひとたちといっしょに、水（みず）がめを頭（あたま）の  
上（うへ）にのせてやってきて、井戸（いど）の方（ほう）へし  
とやかに歩いて行きました。

とつぜん、ナヒードは、「きつとでき  
る。それに、べんきようでできるって、  
すばらしいことなんだ」と思（おも）いました。  
ナヒードはあしたも学校（がっこう）に行きます。  
そしてその灰（つぎ）の白（しろ）も、そのまた灰（つぎ）の白（しろ）  
も。でも、ひとりで行くんじゃありませ  
ん。ナヒードは、学校（がっこう）に行きたかった  
お田（かあ）さんの思（おも）いをせあつて行くのです。  
たくさんよくべんきようしたら、なら  
ったことをみんなお田（かあ）さんにおしえて  
あげられます。かぞくみんなにだつて、  
おしえてあげられるのです。

# ジョセフ・フィールディング・スミス (1876・1972)



「おきてちょうだい、ジョセフ。」  
お田<sup>かあ</sup>さんが<sup>みみ</sup>耳もとでい  
ました。『だれかに<sup>あか</sup>赤ちゃん<sup>う</sup>が生まれるん  
だ』とジョセフは<sup>おも</sup>思いました。ジョセ  
フ・フィールディング・スミスは<sup>きょうだい</sup>兄弟

の中で一ばん<sup>なか</sup>お兄さん<sup>にい</sup>だったので、お  
田<sup>かあ</sup>さんを馬車<sup>ばしゃ</sup>にのせて、<sup>あか</sup>赤ちゃん<sup>う</sup>が生  
まれる人<sup>ひと</sup>のところまで、よくつれてい  
つてあげていたのです。

<sup>だい</sup>大管長<sup>かんちやう</sup>は、そのころのことを<sup>おも</sup>思い出<sup>だ</sup>

して、こういつています。「真夜中にお  
きるんですよ。ランタンをさげて、ま  
つくらな納屋へ行って、馬を馬車につ  
なぐんです。そして、田をのせていく  
んです。どうして赤んぼうは夜中にはば  
かり生まれるのかと、わたしはふしぎ  
でしかたがありませんでしたよ。」

少年ジョセフ・フィールディング・  
スミスは、お父さんがるすのあいだ、  
畑しごとををてつだったり、12人の弟や  
妹のせわをしたりもしました。おむつ  
をかえたり、パンやパイをやいたり、  
キルティングのてつだいもしました。  
ジョセフ・フィールディング・スミス  
は学校が大すぎて、よく本を読みまし  
た。聖典はとくによく読みました。12  
さいのときには、モルモン経をぜんぶ  
読んでしまっていたほどでした。

ジョセフ・フィールディング・スミ  
スはZCMI（ソルトレーク・シティー  
の大きなデパート）で、お父さんの  
秘書として、お金をもらわずにはたら  
きました。そして、けつこんし、イギ  
リスへ伝道に行きました。1901年に伝  
道をおえると、教会歴史事務局につと  
めました。そして、ソルトレーク・シ  
ティーで9年間ホームミッショナリー  
としてはたらき、16年間YMMIAの  
管理会員としてはたらきました。1906  
年には、教会歴史記録者の補佐になり  
ました。それから少しして系函協会に  
入り、30年間もそのしごとをつづけま

した。1921年3月には教会歴史記録者  
になり、49年間そのしごとのためには  
たらきました。

33さいのとき、ジョセフ・フィー  
ルディング・スミスは十二使徒にめされ  
ました。

ジョセフ・フィールディング・スミ  
スにはたくさんしごとがあつて、と  
てもいそがしくはたらかなければなり  
ませんでした。それでもその間、1945  
年から1946年まではソルトレーク神殿  
の神殿長としてはたらき、教会の教え  
についてたくさんしごとを書き、25さ  
つの本をしゆつぱんしました。ジョセ  
フ・フィールディング・スミスは音楽  
がすきで、さんび歌もいくつか書きま  
した。それに、65さいをすぎてもハン  
ドボールをしました。

ジョセフ・フィールディング・スミ  
スは4人の大管長のもとで、60年のあ  
いだ使徒としてはたらき、93さいのと  
きに10人目の大管長になりました。大  
管長としてはたらいたのはたったの2  
年半でしたが、たくさんしごとな  
プログラムがはじめられました。

そして、1972年7月2日、ジョセフ・  
フィールディング・スミス大管長は世  
をさつたのでした。ジョセフ・フィー  
ルディング・スミス大管長は、かいた  
く時代から現代にいたる長い年月を生  
きぬいた人でした。



# すくいぬしをみじかに

ジョリーン・メレディス

ジョリーン・メレディスによる十  
二使徒定員会会員エル・トム・ペ  
リー長老へのインタビューより

★ ★

メレディス記者：ペリー長老、世界の  
子供たちにおけて何かお話していた  
だけないでしょうか。

ペリー長老：子供たちには、できるだ  
けたくさんすくいぬしの生涯について  
勉強し、できるだけすくいぬしに近く  
生活するようにすすめたいと思いま  
す。うれしい気持ち、しあわせな気  
持ちになれるのは、イエス様にした  
がって生活するときだけです。イエ  
ス様にしたがって生活しないと、必  
ずばつをうけ、かなしい気持ちにな  
ったり心がいたくなったりするの  
です。

勉強したことがよくおぼえられる  
ような方法を小さいころから自分で  
考えてみるといいですね。たとえば、  
ファイルを作ることがあります。わ  
たしのファイルはとてもかんたんで、  
8さいの子供でも使うことができま  
す。聖典を読んでいて、とくに大切

なところを見つけると、私はそこに  
線をひいて何をいいあらわした聖句  
かを考えます。そして、その聖句が  
信仰についてのものなら、まわりの  
あいているところに「信仰」と書き  
ます。

わたしたちは、聖句をおぼえよう  
としないで、読むことにばかり時間  
をつかっているように思います。ふ  
つうわたしたちは読んだものの10/P  
ーセントしかおぼえていませんが、  
どりよくすれば、50~60/P  
ーセントもおぼえることができるので  
す。それを8さいの時からはじめたとした



ら、ずいぶんたくさんのお話を  
聞くことができると思います。

メレディス記者：つぎに、ペリー長老  
のお父さんやお母さん、そして子供  
のころのことについてすこしお話し  
していただけますか。

ペリー長老：わたしは、教会のすぐ近  
くでそだちました。わたしが生まれ  
てたったの6カ月の時に、父はかん  
とくになりました。そして、6さい  
の時、わたしたちのワード部では教  
会堂をたてました。父は、教会堂の  
工事にいつもわたしたちをつれて行  
きました。わたしがさいしょにした  
ことは、板からくぎをぬいて、もう  
一度使えるように、まっすぐにする  
ことでした。

父の家族は大家族でした。アイダ

ホでかいたくをしていましたが、と  
てもまずしかつたのです。ハイスク  
ールにあがる年になった時、父はお  
とうさんに学校に行かせてほしいと  
いいました。するとおとうさんは、  
父に5ドルとソルトレーク行きの片  
道切符をわたして、あとは自分でな  
んとかするようにといいました。そ  
うして父はジョセフ・エフ・スミス  
大管長の家の牛のせわをすることに  
なり、3年半の間、スミス大管長の  
家族のようにビーハイブハウスでく  
らしたのです。父はエル・ディー・  
エスハイスクールに入り、それから  
ユタ大学に行き、卒業の時は総代を  
つとめました。それから、アイダホ  
州リックスバーグの小学校の校長に  
なりました。そして、そこで先生を





していた<sup>はは</sup>と知り<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ったのです。やがてふたりは<sup>は</sup>けっ<sup>こ</sup>んし、父は<sup>ちち</sup>校長<sup>ちやうじやう</sup>をやめて、<sup>は</sup>うり<sup>つ</sup>学校<sup>がく</sup>に行き、<sup>は</sup>ん<sup>ご</sup>士<sup>し</sup>になりました。

父はととてもよく<sup>べんきやう</sup>勉強<sup>べん</sup>する<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>でしたが、<sup>く</sup>つろ<sup>ぎ</sup>方<sup>かた</sup>も<sup>し</sup>知<sup>ち</sup>っていました。土<sup>つち</sup>よう<sup>ど</sup>日<sup>ひ</sup>の<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>などは、<sup>かぞく</sup>家族<sup>かぞく</sup>といっしょに<sup>ろー</sup>ガン<sup>キヤ</sup>ニオン<sup>ニオン</sup>に行<sup>い</sup>って<sup>つ</sup>り<sup>を</sup>し<sup>たり</sup>、<sup>ハイ</sup>キン<sup>グ</sup>を<sup>し</sup>たり、<sup>ポ</sup>ール<sup>で</sup>あ<sup>そ</sup>ん<sup>だ</sup>り<sup>し</sup>ました。わたしは<sup>こ</sup>い<sup>さ</sup>な<sup>こ</sup>ろ<sup>か</sup>ら<sup>ちち</sup>父<sup>と</sup>いっしょに、<sup>て</sup>い<sup>つ</sup>投<sup>げ</sup>を<sup>し</sup>ました。

母<sup>はは</sup>は、とつても<sup>す</sup>ば<sup>ら</sup>しい<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>でした。わたし<sup>が</sup>知<sup>し</sup>っている<sup>ひと</sup>人<sup>なか</sup>の中<sup>なか</sup>では、<sup>だ</sup>れ<sup>よ</sup>り<sup>も</sup>は<sup>た</sup>ら<sup>き</sup>も<sup>の</sup>で<sup>した</sup>。朝<sup>あさ</sup>は<sup>い</sup>ち<sup>ば</sup>ん<sup>は</sup>早<sup>は</sup>く<sup>お</sup>きて、<sup>よ</sup>る<sup>は</sup>み<sup>ん</sup>な<sup>が</sup>ね<sup>て</sup>から<sup>ベ</sup>ッド<sup>に</sup>入<sup>い</sup>りました。おき<sup>て</sup>い<sup>る</sup>あ<sup>い</sup>だ<sup>は</sup>、<sup>ず</sup>つ<sup>と</sup>は<sup>た</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>し</sup>た。母<sup>はは</sup>は<sup>か</sup>ぞ<sup>く</sup>を<sup>だ</sup>い<sup>いち</sup>に<sup>か</sup>ん<sup>が</sup>考<sup>が</sup>えて<sup>い</sup>て、<sup>ちち</sup>父<sup>を</sup>と<sup>て</sup>も<sup>よ</sup>く<sup>た</sup>す<sup>け</sup>ま<sup>し</sup>た。父<sup>ちち</sup>は<sup>18</sup>年<sup>かん</sup>間<sup>かん</sup>と<sup>く</sup>を<sup>し</sup>て<sup>は</sup>た<sup>ら</sup>き、<sup>そ</sup>れ<sup>か</sup>ら<sup>20</sup>年<sup>かん</sup>ス<sup>テ</sup>ー<sup>キ</sup>部<sup>か</sup>い<sup>で</sup>は<sup>た</sup>ら<sup>き</sup>ま<sup>し</sup>た。

わたしは、<sup>こ</sup>い<sup>だ</sup>の<sup>ころ</sup>、とつても<sup>す</sup>ば<sup>ら</sup>しい<sup>せん</sup>先<sup>せい</sup>生<sup>せい</sup>に<sup>め</sup>ぐ<sup>ま</sup>れ<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。何<sup>なん</sup>年<sup>ねん</sup>も<sup>し</sup>よ<sup>う</sup>等<sup>とう</sup>協<sup>きやう</sup>会<sup>かい</sup>の<sup>か</sup>い<sup>ち</sup>ん<sup>が</sup>を<sup>し</sup>て<sup>い</sup>た<sup>ジ</sup>ョ<sup>ン</sup>ソ<sup>ン</sup>姉<sup>まい</sup>妹<sup>まい</sup>の<sup>こ</sup>とは、<sup>い</sup>ま<sup>で</sup>も<sup>わ</sup>す<sup>れ</sup>ら<sup>れ</sup>ま<sup>せ</sup>ん。ジ<sup>ョ</sup>ン<sup>ソ</sup>ン<sup>姉</sup>妹<sup>まい</sup>は<sup>と</sup>て<sup>も</sup>や<sup>さ</sup>しい<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>で<sup>した</sup>。

で<sup>も</sup>一<sup>いち</sup>番<sup>ばん</sup>よ<sup>く</sup>お<sup>ほ</sup>え<sup>て</sup>い<sup>る</sup>の<sup>は</sup>、

コー<sup>ル</sup>姉<sup>まい</sup>妹<sup>まい</sup>です。コー<sup>ル</sup>姉<sup>まい</sup>妹<sup>まい</sup>は、<sup>ほ</sup>う<sup>い</sup>石<sup>いし</sup>の<sup>よ</sup>う<sup>に</sup>す<sup>ば</sup>ら<sup>し</sup>い<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>で<sup>した</sup>。ある<sup>とき</sup>コー<sup>ル</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>は<sup>ト</sup>レ<sup>イル</sup>ビ<sup>ル</sup>ダ<sup>ー</sup>ズ<sup>ズ</sup>（<sup>し</sup>よ<sup>う</sup>等<sup>とう</sup>協<sup>きやう</sup>会<sup>かい</sup>の<sup>か</sup>い<sup>ち</sup>ん<sup>が</sup>の<sup>こ</sup>い<sup>だ</sup>ち）<sup>と</sup>い<sup>っ</sup>し<sup>よ</sup>に<sup>ハイ</sup>キン<sup>グ</sup>に<sup>い</sup>く<sup>こ</sup>う<sup>と</sup>し<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。そ<sup>し</sup>て、<sup>た</sup>か<sup>ら</sup>さ<sup>が</sup>し<sup>ゲ</sup>ム<sup>を</sup>計<sup>けい</sup>画<sup>かく</sup>し<sup>た</sup>の<sup>で</sup>す<sup>が</sup>、<sup>そ</sup>れ<sup>が</sup>ち<sup>よ</sup>つ<sup>と</sup>か<sup>わ</sup>つ<sup>た</sup>、<sup>た</sup>か<sup>ら</sup>さ<sup>が</sup>し<sup>ゲ</sup>ム<sup>だ</sup>つ<sup>た</sup>の<sup>で</sup>す。子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>た<sup>ち</sup>の<sup>さ</sup>が<sup>す</sup>た<sup>か</sup>ら<sup>ひ</sup>と<sup>つ</sup>ひ<sup>と</sup>つ<sup>が</sup>、<sup>レ</sup>ッ<sup>ス</sup>ン<sup>に</sup>か<sup>ん</sup>け<sup>い</sup>の<sup>あ</sup>る<sup>も</sup>の<sup>で</sup>、<sup>ひ</sup>と<sup>つ</sup>さ<sup>が</sup>し<sup>あ</sup>て<sup>る</sup>と、<sup>そ</sup>れ<sup>が</sup>ま<sup>た</sup>べ<sup>つ</sup>の<sup>レ</sup>ッ<sup>ス</sup>ン<sup>を</sup>教<sup>お</sup>え<sup>て</sup>く<sup>れ</sup>る<sup>よ</sup>う<sup>な</sup>も<sup>の</sup>で<sup>した</sup>。そ<sup>れ</sup>に、<sup>い</sup>つ<sup>も</sup>す<sup>て</sup>き<sup>な</sup>し<sup>よ</sup>う<sup>ひ</sup>ん<sup>が</sup>用<sup>よう</sup>意<sup>い</sup>し<sup>て</sup>あ<sup>つ</sup>て、<sup>さい</sup>ご<sup>に</sup>は<sup>と</sup>く<sup>べ</sup>つ<sup>な</sup>ご<sup>ほ</sup>う<sup>び</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>の</sup>で<sup>した</sup>。わ<sup>た</sup>し<sup>た</sup>ち<sup>の</sup>こ<sup>ころ</sup>を<sup>ひ</sup>き<sup>つ</sup>け<sup>る</sup>コー<sup>ル</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>の<sup>ど</sup>く<sup>そ</sup>う<sup>て</sup>き<sup>な</sup>方<sup>ほう</sup>法<sup>ほう</sup>は、<sup>め</sup>目<sup>め</sup>を<sup>み</sup>る<sup>ば</sup>か<sup>り</sup>で<sup>した</sup>。

コー<sup>ル</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>は、<sup>あ</sup>た<sup>え</sup>つ<sup>づ</sup>け<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>で<sup>した</sup>。こ<sup>の</sup>あ<sup>い</sup>だ、<sup>コー</sup>ル<sup>先</sup>生<sup>せい</sup>の<sup>お</sup>す<sup>こ</sup>さん<sup>か</sup>ら<sup>で</sup>ん<sup>わ</sup>が<sup>か</sup>か<sup>つ</sup>て<sup>き</sup>ま<sup>し</sup>た。コー<sup>ル</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>が<sup>わ</sup>た<sup>し</sup>の<sup>た</sup>め<sup>に</sup>作<sup>つく</sup>つ<sup>て</sup>く<sup>さ</sup>つ<sup>た</sup>プ<sup>レ</sup>ゼ<sup>ン</sup>ト<sup>を</sup>、<sup>と</sup>ど<sup>け</sup>て<sup>く</sup>れ<sup>る</sup>と<sup>い</sup>う<sup>の</sup>で<sup>す</sup>。お<sup>す</sup>こ<sup>さん</sup>は、<sup>わ</sup>た<sup>し</sup>の<sup>じ</sup>む<sup>しょ</sup>に<sup>先</sup>生<sup>せい</sup>が<sup>お</sup>作<sup>つく</sup>り<sup>く</sup>さ<sup>つ</sup>た<sup>う</sup>つく<sup>しい</sup>キ<sup>ルト</sup>を<sup>も</sup>つ<sup>て</sup>き<sup>て</sup>く<sup>れ</sup>ま<sup>し</sup>た。美<sup>う</sup>し<sup>い</sup>も<sup>よ</sup>う<sup>を</sup>え<sup>が</sup>い<sup>て</sup>、<sup>き</sup>よ<sup>う</sup>に<sup>ス</sup>テ<sup>ツ</sup>チ<sup>が</sup>ほ<sup>ど</sup>こ<sup>さ</sup>れ<sup>て</sup>い<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>は、<sup>い</sup>ま<sup>も</sup>91<sup>さい</sup>



です。このすばらしい先生のしんせつを思うと、わたしは、なみだをおさえることができませんでした。

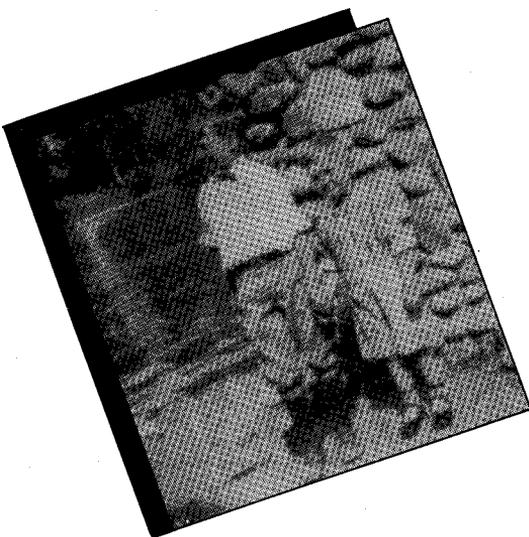
メレディス記者：最後に、ペリー長老のご家族のことを少しお聞きしたいと思いますが……

ペリー長老：ソルトレーク市にふたり、それから東部の方にふたり、まごがいます。わたしたちは月に1回、ソルトレーク市にすんでいるまごたちといっしょに家庭の夕べをします。あき地にいろいろなものをうえること、それがわたしたち家族のいちばんせい大なかつどうです。わたしたちは、このにわのあき地をペリー家福祉農場とよんでいます。まごたちにも、わりあてがあります。わたしたちは、みんなでいっしょに種をまき、

水をやり、かり入れをするのです。こうすれば、よく手入れをすると神様がわたしたちに、たくさんのめぐみを下さるといふ、神様のめぐみの下さり方を、少しでもまごたちに、教えることができると思うのです。小さな種から、300倍もの実がなるのですから。

メレディス記者：さいごに、子供たちについて何かひとことおねがいたいのですが。

ペリー長老：子供たちは何でもうけ入れることができますし、いろいろなことによく気がつきます。それに、しどうしゃにしたがうことができます。子供たちは、はつらつとしていて、何でもよく学びます。子供というものは、すばらしいものですね。

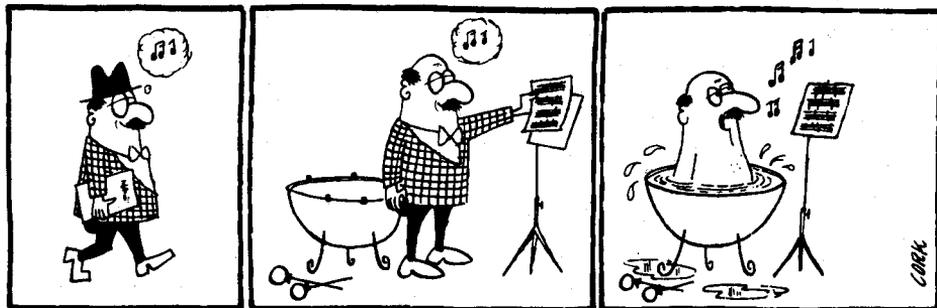


# おもちゃばこ



アからコのうち、1から10のことばについて説明しているのはどれですか。

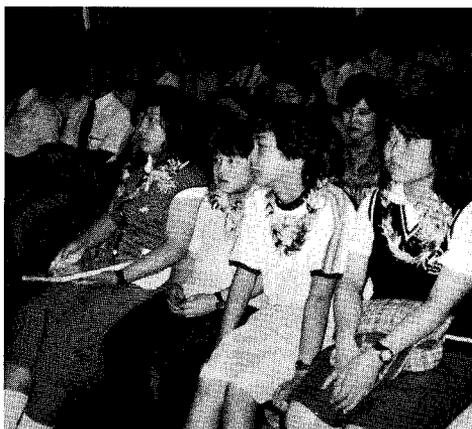
	1. リアホナ	オ	ニーファイがレーバンから手に入れたきろく
	2. ラメアントム	カ	リーハイとニーファイが見たじげんの中で、神のみことばをあらわすもの
	3. しんちゆうばん	キ	かたくななソーラム人が、いのるときにつかつた台
	4. テゼレト	ク	モロナイが上着をひきさいて「われらの神と宗教と自由と平和と妻子のために」と書いたもの
	5. じゆうのはた	ケ	神さまにかんしゃをささげるために、リーハイが作った石の台
	6. パウンテフル	コ	リーハイとそのかぞくがキャンプした、くだものや、のみつがたくさんあるところ
	7. さいだん		
	8. 石なげき		
	9. てつのほう		
	10. やくそくのち		
ア	レーマン人がつかつたぶき		
イ	みつばち		
ウ	ニーファイと正しい人々のためによういされた、すばらしい土地		
エ	人々が正しい行ないをするときだけ、じしゃくのように道をさしめす、しんちゆうのどうぐ		
			4-04 4-6 4-8 4-7 4-9 4-9 4-7 4-8 4-7 4-9 4-9 4-7 4-8 4-7 4-9 4-9 4-7 4-8 4-7 4-9



みんな みつけられますか？

どこに隠れているかな？



## なごりを惜しむ 菊地長老歓送会

7月11日、吉祥寺の東京ステーキ部センターに於いて菊地良彦長老歓送会が催された。

教会幹部に召されて以来4年間、日本・韓国地域担当代表役員として働かれた長老が、この度その任期を終えて、御家族と共にソルトレークに移られることになったためである。菊地長老の在任期間中、日本の教会員数は34,000人から72,000人に、ステーキ部数は7つから22へと成長した。

当日礼拝堂には東京地区の各ステーキ部から教会員がつめかけ、鈴木正三地区代表の司会によって会は進められた。ステーキ部長、地区代表による長老への感謝の言葉、長老の思い出話などに、美しい独唱やコーラス、独奏などが加わり、会を盛り上げ

写真左：閉会后、分かれを惜しむ菊地長老夫妻。  
写真右：歓送会に出席した菊地家の子供たち。  
(右からサラさん、リナさん、又意くん、ルカさん)  
写真下：菊地長老との思い出を語る田中長老。



ていた。最後に菊地長老御夫妻が話され、約2時間にわたる会を終了した。

菊地御家族は7月13日、日本を後にし、ソルトレークに向かわれた。



## 日の光栄の喜びを多くの人々に

七十人第一定員会会員  
菊地良彦長老

**本**日は私共のためにお集まり下さり、多くの方々からたくさんの演奏や歌、励ましの言葉をいただき心から感謝しています。皆様のご親切を一生忘れることがないでしょう。本当にありがとうございました。

私は東京神殿が献堂された時、キンボール大管長がお祈りされる真後ろに座っておりました。その時私は、閉じている目を何度か開けようとしてしました。神様の王国がこのような靈感と雰囲気を持った平和な所であると感じたからです。皆と一緒に「主の『みたま』は火のごと燃え」（讚美歌175番）を歌いました時に、歓喜にむせび泣くという言葉がございましたが、この世の言葉で表わすことのできない幸福感を満喫致しました。その時、たくさんの私たちの先祖が、白装束身をまとい、神殿に入りきれずにいるのを幻で見ました。

日本の地に神様ののみ国が育ち始めてもう80数年が過ぎようとしています。1980年の地域大会の時にヒンクレ副管長が、次のようなグラント大管長の日記を引用なさいました。「私には、この伝道部が教会の中で最も成功した伝道部のひとつになるという揺るぎない確信がある。最初はゆっくりとした歩みかもしれない。しかし刈り入れは偉大なものとなり、やがてそれは世の人々

を驚かすものとなるであろう。神がそのみ手をこの国の上に注いでこられたからである。」（「聖徒の道」1981年1月号、p.24）

また故ウイルフォード・ウッドラフ大管長はこのように語っています。「主は神の創造せる者の内から、この世に住まう優秀な息子娘たちの霊を少数選んだ。この優秀な霊たちは、時満ちたる最後の神権時代に肉体にて立ち、地上に神の王国を組織し、それを達成し防御するため、また永遠の神権を受けるため、6千年間霊の世界に取っておかれたのである。」（*Genealogy Magazine* 「系図誌」23：165）皆様は、一人一人天のお父様のもとで取っておかれた素晴らしい霊です。目が見えない方、足が不自由な方もいらっしゃるかもしれませんが。でもあなた方は、神の栄光をこの末日に表わすべくして、この世に現在生まれて来たのです。

私たちは戦後シラミのたかっているボロを着て、何も無い焼け野原から育ちました。私の父は戦争で死にました。母はあか切れだらけの手で朝から晩まで働き、4人の子供を育てあげました。そのような状態でたくさんの兄弟姉妹は育ちました。

そして時が満ちました。異国の名も知らない人々が私たちのドアをたたきました。26年前になりますが、母と兄が、おまえだけは高校に入れてやると言ってくれていま

した。私もそのつもりで準備していました。ある夜、母と兄が私を高校にやるだけのお金がないと話合っているのを聞きました。次の朝、私は母と兄に「定時制高校に行きます」と言いました。

それから私は仕事を探しました。朝早くとうふを作って売る仕事が見つかりました。喜んで働きましたが、育ち盛りの少年にとって朝の早起きは大変でした。朝は3時から4時頃起きてとうふを売り歩き、夜は6時頃から定時制高校に通い、11時頃に帰って来るという生活が続きました。ある日、疲労が重なり、倒れてしまいました。病院のベッドで先生から、骨が冷えてゆく奇病だと言われました。もう先がないという自分の状態を知った時、生まれて初めて手を合わせ、見知らぬ神様なる存在にお祈りを捧げました。この世に生きる目的があるなら助けてもらいたいと祈りました。

2カ月が過ぎ、奇跡的に快復し退院しました。それから丁度3日目に宣教師が訪ねて来ました。私は外人は大嫌いでした。「おまえたちはおれのおやじを殺したではないか。」少年であった私は、恨みを持っていました。私は、帰ってくれと言いました。しかし外人宣教師の丁寧な、たどたどしいけれども心温まる日本語を聞いて、5分だけと家に入れました。それが宣教師との出会いでした。

私は、ジョセフ・スミスの話とその素晴らしい教えを、渴いた喉を潤すように飲み干しました。2週間後、寒い北海道の4月の海でバプテスマを受けました。その時体が熱くなって、涙がたくさんこぼれ落ちました。私は宣教師たちと神様に感謝しました。

皆様方もそのようにして宣教師から懐しい永遠の調べを聞いて、教会に集うようになっています。この大切な福音の光をもっとたくさんの人々に分かち与えようではありませんか。

私は、キンボール大管長が東京神殿を奉獻された時に感じた永遠の日の光栄の喜びを、ひとりでも多くの人々に味わっていただきたいと祈るような気持ちで主のみ業を進めてきました。しかし、自分を振り返って、もっともっと素晴らしくできたのに、もっと幸福を同胞に差し上げられたのに、自分の不出来のために十分できなかったのが残念でなりません。

兄弟姉妹の皆さん、神様は本当に生きておられます。私ができなかった分を心をひとつにして、さらに前進させて下さい。

これまで私ども家族のためにたくさんの人々がお祈りして下さったに違いありません。どうもありがとうございました。また、きょうこの場にあるのは、天のお父様の恵みによると同時に、皆様の助けがあったればこそできたことと思います。深く感謝しています。また私の妻にも心から感謝しています。家内がいなければ今日、ここに立つことはなかったでしょう。

ソルトレークに行きましても、日本人として恥じることはないように一生懸命頑張りたいと思います。皆様一人一人の上に主の平安がありますよう心からお祈り申し上げます。

---

\*これは歓送会の席上で話された菊地長老のお話から抜粋したものです。

## 外部の団体と連携した 「姓氏大講演会」 注目される初めての試み

### 系図協会協賛

「歴史のなかにルーツを探る」のテーマの下に「姓氏大講演会」が6月27日（日）の夕べ、東京ステーク部センターで開催された。日本家系図学会主催、系図協会その他4団体協賛によるこの集会は、一般の歴史・系図関係の研究者や愛好家を対象に催された。集会への呼びかけは日本家系図学会や協賛団体の会員の他に、地元武蔵野市にある郷土史研究会や歴史・古文書の研究会などにもなされ、そして朝日、毎日をはじめ多くの新聞を通じて報道された。当日は一般の方々約60名、教会側からも鈴木正三地区代表をはじめ100名を超える兄弟姉妹が参加し、穏やかな雰囲気の中に講演が開始された。

講師は、日本家系図学会会長で、米国立オリエント大学名誉教授の丹羽基二氏、下野

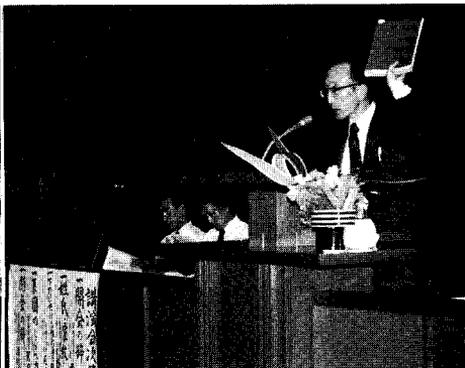
姓氏家系研究会会長の<sup>遼沢</sup>俊郎氏、家系研究に学識の深い武田光弘氏の3名。丹羽氏は家紋研究の権威で、多くの著作があり、1980年にはソルトレーク・シティーで開かれた「世界記録会議」にユタ系図協会から招待を受け参加された。当教会の良き理解者のひとりである。

3人の講師からは、姓氏研究の上で大切な手がかりとなる地名と家紋、系図探求に必要な参考文献とその使い方など約3時間にわたって講演が繰り広げられた。

最後に系図協会東京マイクロフィルムセンター所長・津村又三郎兄弟が壇に立ち、今回の講演会のいきさつを説明し、これからも日本家系図学会と協力してこのような会を開きたいとの抱負を述べ、講演会を終了した。

今回のように系図協会が、外部の団体と協力して講演会を催したことは今までになかったことであり、教会外の人々との結び付きを得る絶好の機会と言えよう。教会の各種プログラムが、様々な形で地域社会の人々に働きかけることのできる可能性を示したひとつの例として、高く評価されよう。今後の活動が期待される。

左：熱心に耳を傾ける講演会出席者。右：系図資料を手に講演する日本家系図学会会長・丹羽基二氏。



☆…1981年度に日本家系図学会から発行された「姓氏と家紋」（発行人：丹羽基二氏）で、1980年にユタ州ソルトレーク・シティで行なわれた「世界記録会議」の様子が特集を組んで取りあげられた。招待された教会外部の人たちにとって、教会の系図活動は驚異の目で見られたようである。日本家系図学会から転載の許可をいただき、大会の様相を紹介する。



▲講演中の丹羽基二会長

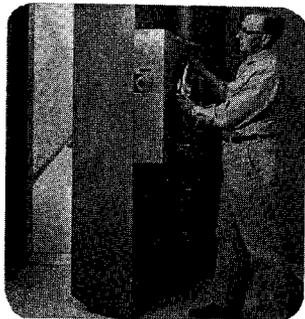
はないか？」  
 「氏「最近、専門の研究者もふえた。おいおい、わたくしたちのルーツもわかってくるようになるう」  
 丹羽「貴下の行為は、一つの使命と勇氣を与えた。その評価は最高の榮譽に値する。ところで私もルーツの研究に入ってから四十一年になる。貴下が日本に來られてから、私のことを日本のヘイリーと呼ぶ人が多くなった。ヘイリー氏によって私の名が埋没してしまったのは遺憾である」と。  
 このとき、期せずして場内に爆笑がおこった。  
 「ヘイリー氏は、席を立てて歩みより、紋付羽織袴の丹羽会長の手を両手でつつんだ。後日、丹羽会長はヘイリー氏のそのやわらかい手のぬくもりは、心臓にまで届くような気がし、同好の士の友情を感じたと語った。  
 ソルトレークとは、その名の通り塩湖である。大きさは琵琶湖の九倍もあり、濃度もイスラエルの国境にある死海よりも塩からいという。岸边に塩水が噴出し、塩の結晶塔が五米にも達し、浮いたまま新聞が読めて、昼寝も出来るそうである。  
 その昔、キリスト教一派の教徒の先祖が、東部より砂漠を越えてこの湖を見たとき、聖書による「地の塩」とはここであり、この地こそ「神の予言の地」だと信じた。開拓にはげみ、不断の努力により不毛な荒野を、緑したたる美しい町に造り変えたのである。  
 したがって、人口十八万の大半は末日聖徒イエス・キリスト教の教徒である。この宗派は禁酒禁煙が徹底している。そればかりではなく、コーヒーやお茶も用いない。もちろん、酒やタバコをたしな

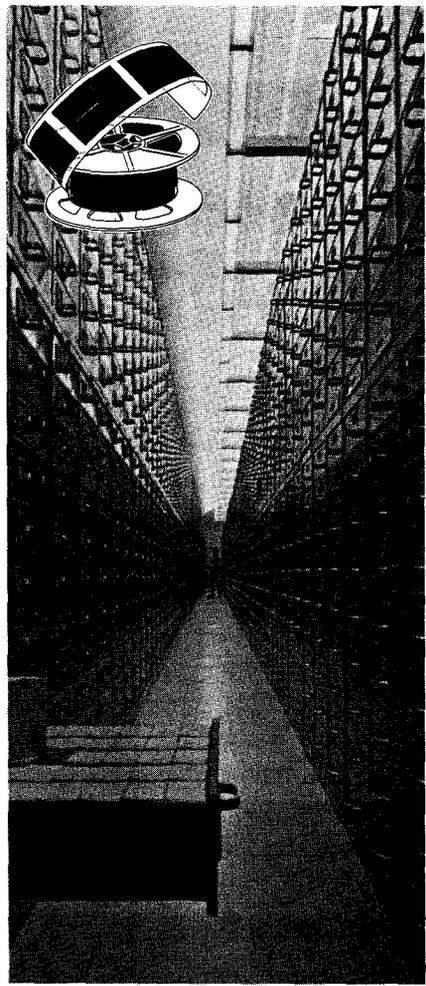


▲グラナイト・マウンテン記録保管庫の外観

▼地下保管庫の大きなドアは14トンもある

んではいけないという法律があるわけではないので、レストラン等にはアルコール類は一応用意してあるが、注文する人がほとんどない。タバコ好きの旅行者は、販売店が少ないので買うのに一苦労する。酒もタバコもまず、人々は何をのむか？ それは、水だった。一年中、ロッキー山脈から流れて来る雪どけ水、その冷たい水が乾燥した気候の中で実にうまい。日本の水以上にすばらしい味がした。外国に行ったら生水をのむなというが、この地では全く杞憂にすぎなかった。  
 ソルトレークには、末日聖徒イエス・キリスト教会が設立した世界最大の系図図書館がある。世界各国から集められた六〇〇万以上の家族の記録を、マイクロフィルムにして、グラナイトマウンテンと呼ばれる岩山の地下二〇〇米の地下室に保管されている。この地下保管庫は、六〇〇〇平方メートルの面積をもち、壁面をコンクリートと鋼鉄でかため、原子爆弾にも耐えるというから、まさに壮観である。  
 ここには、国際公文書会議、アメリカ図書館協会、伝承歴史学会等世界中の記録保存を必要とする団体が加入している。日本の系譜・古文書等にも多くの資金を投じて収集しているから、日本の系図を調べるのに、ここに出かけた方が日本をめぐるより速いということになるかも知れない。  
 前後十日間、たまさかのアメリカの旅であったが、世界の系譜研究者と国籍・人種・民族・宗教のちがいを越えて、一堂に会し交観し得たことは大きな喜びであった。おわりにたいへんお世話になった日系三世（ヘンリー・ミヤケ）ご夫妻はじめ、ソルトレークの皆様にも厚くお礼を申し上げます。





## 世界記録会議に参加して

米国の中西部、ユタ州の首府ソルトレーク市で、一九八〇年八月十日から十六日まで第二回世界記録会議が開催された。この会議は末日聖徒イエス・キリスト教会系図協会の主催で、世界四十三ヶ国から歴史・医学・統計学・人口・資源等の学者・専門家と、家族の歴史や系図に関心のある一般の人々約一万二千人が「受け継ぎを守る」という大会のテーマのもとに結集した。

会議は、一般集会和二百余の専門部会に分れて研究発表が行われた。日本からは丸山博氏(元大阪大学教授・医博)平田欽逸氏(中京大学教授・医博)丹羽基二氏(日本家系図学会会長)等九人が招待された。日本関係の専門部会で発表された演題は次の通りである。

「過去帳からみた人口動態」  
丸山博 博士  
「過去帳からみた家系譜」  
平田欽逸博士

「日本における家史研究の問題点とその解決法」  
丹羽基二氏  
「日本の家史研究における苗字・地名・家紋の役割」  
丹羽基二氏  
「日系アメリカ人のための家史」  
グレッグ・グブラー博士  
鈴木健二氏  
「日本・中国・韓国における家史資料(日本)」

左上：世界記録会議主会場のパレスホールに集った12,000人の参加者  
右上：グラナイト・マウンテンのマイクロフィルム保管庫  
右下：楡井氏とアレックス・ヘイリー氏

## 楡井 範正

(日本家系図学会事務局長)

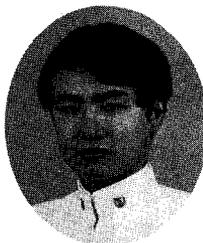


「日本・中国・韓国における家史資料(韓国)」  
揚 培奈氏  
「徳川時代の農民の世襲」  
アン・ウォルソール博士  
「侍と商家の歴史」  
Lキース・ブラウン博士  
「文献資料の不足を乗り越えて」  
ラッセル・N堀内博士  
「一般集会では、空前のベストセラー『ルーツ』の著者アレックス・ヘイリー氏の特別講演があった。同氏は『ルーツ』発刊までの経緯を情熱をこめて語り、来会者に多大の感銘を与えた。講演後丹羽当学会会長はヘイリー氏に、次のような、いくつかの質問を行った。」

さて、その一問一答。

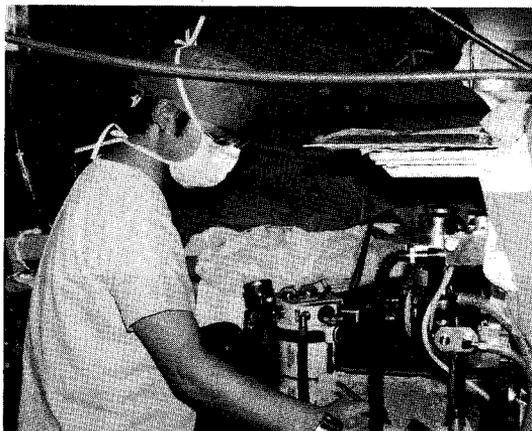
丹羽「日本では七代くらいは、苦勞しなくても調べられる。そのために苗字の辞典もある。貴下(あなた)の国はどうか?」  
ヘイリー「歴史が複雑で、とても出来ない。日本の国はうらやましい」  
丹羽「貴下のご努力には敬意を表する。しかし貴下だから出来ることで、他の多くのアフリカに祖先をもつ者はたいへんだ。よい方法

## 医者が治療し、 神が治す



東京北ステーク部所沢支部  
医師(防衛医科大学校病院研修医)

渡辺 和彦



**医**大を卒業してから1年と4カ月、殻を破って初めて接する実際の医療現場では、実に驚くべきことの連続でした。当初、外科の研修から始まった私には重症の患者が多く、残された期間が後数カ月とか、あるいは明日をも知れぬという病状の方もいらっしゃる。大体は癌の末期状態にある患者さんなのですが、そのような人々に対しては私達の対応もかなり微妙なものになってきます。

現在、日本の医療機関では、癌患者のほとんどは本当の病名を知らされることはありません。このことの是非に関してはいろいろと意見の分かれるところですが、明確な死生観を持たず、死後の世界に対して、無知と、それからくる不安しか感じられない日本人が多い現状では、とても神ならぬ人の口からは、生命のタイムリミットを知らせるにも等しい言葉を発することはできません。

患者は常に「自分は、本当は癌ではない

かしら」とか「少しも変わらないけど、まさかこのまま元の身体に戻れないのでは……」と不安に満ちた日々を送っています。こういう時は、「先生が、私の病気は癌なんかじゃないよと言って下さった。」「少しずつだけ前よりは良くなってきていますよ」の一点に生命と快復への希望をつないでいるのが、痛いほど私達にも伝わってきます。こういった快復の見込みのほとんどない患者さんに本当の病名を隠しながら治療しなければならないのはつらく、時にはせつなくも感じられます。

現代の医療技術の進歩には目を見張るものがあり、確かにこれまで不治の病とされてきた幾つかの癌も、最近では治る病気へと変わってきているのも事実です。しかし、人の知恵の最先端を行く科学の力をもってしてもどうにもならないことは山ほどあります。何万何千という病気の内、人の力で治すことのできるのはごくわずかなものです。私は、まだ学生の頃に「医師が治療し、

神が治す」という言葉を教わりました。この言葉は、人間に本来備わっている治癒力じゆりきが重要であるということと、人間が行なう医療には限界があり、人の知恵ごときで高慢になってはならないというふたつの意味があると思います。

高慢になった医療は、往々にしてトラブルのもとになります。「病気を見て患者を見ず」というのもその一例です。人間が肉体と霊とからできていることを忘れると、この言葉のようになってしまいます。時折、肉体的な病気の治療に専念するあまり、霊が病んでいるのに気づかないことがあります。こんな時は不思議と治療効果が上がりません。逆に、たとえ肉体は不治の病に冒されていても霊の健康な人に出会うと、病気の進行も止まったかに見え、病名を疑いたくなるようなケースも短い期間の中に何度か経験しました。こういった患者さんからは、本当に貴重なことを数多く教わりました。どんな状態にあっても極めて自然な形で人に愛を示すことのできる、純心で、心の透明な方々でした。まるで、主に会うための準備はこのようにするのかと思い知らされるようでした。

主が私たちに与えて下さった肉体と霊とは本当に素晴らしくかけがえのないものです。主はこの両方を健康に保つ上で必要な方法についても、わかりやすく私たちに示して下さいます。このように、必要な時に必要な事柄を、私たちの努力と信仰に応じて惜しみなく与えて下さる主に、私は感謝しています。(わたなべ・かずひこ 1955年生まれ、現在所沢支部第2副支部長)

## 希望も新たに 3人の伝道部長(津谷・清水・ 吉沢伝道部長)の歓送迎会 ——福岡ステーキ部——

去る6月30日、福岡ワード部に於て、6月一杯で福岡伝道部での3年の任期を終える津谷伝道部長夫妻、同伝道部に新たに召された清水伝道部長夫妻、岡山伝道部伝道部長に召された吉沢伝道部長夫妻(元福岡ステーキ部ステーキ部長)を招いて歓送迎会が催された。各伝道部長夫妻が礼拝堂で話された後に、ホールに移って食事を共にした。その間ステージでは歌などが披露され楽しい一時を過ごした。特に3人の伝道部長が舞台上で披露した「アブラハム体操」は、教会員、宣教師から喝采を受け、場内を沸かせた。その後各伝道部長から最後に



▲場内を沸かせたアブラハム体操。左から吉沢・清水・津谷伝道部長。

「ひとつこと」のメッセージが会員に贈られ、会を終了した。

任期を終えられた津谷伝道部長について、ある宣教師は、次のように語っている。「彼の下には百数十人の宣教師が働いていましたが、私たち一人一人に関心を払い愛して下さっているのを常に感じる事ができました。そのことから、救い主に神の子供たちが何十億といようと、決してひとりとして忘れられていないことを実感する事ができました。津谷伝道部長がこれまで私たちに示して下さいた愛に心から感謝します。」

新たに召された清水・吉沢伝道部長のこれからの活躍に期待したい。



## PTA活動

東京西ステキ部八王子第2ワード部  
塚田淑子

**私**にとって「知恵の言葉」は容易な戒めのひとつです。それも推し量るに容易であるという意味で、厳密に考えれば随分破っているかもしれません。家の外にあ

ってどのようにすれば人々に「知恵の言葉」をわかっていただけるかいつも考えます。

相模原に引っ越してから約半年が過ぎる頃、我が家に小学校のPTA推薦委員の方がおいでになり、私に本部役員になって欲しいとのお話がありました。越して来たばかりの私はあっけにとられてしまいました。けれども、ここでは私のような者でも必要とされる地域の事情があるのだらうと考え、引き受けることにしました。

さて、「義を見てせざるは勇無きなり」と良い気持ちになっていた私ではありますが、地域の方々との交流がありませんでしたので、すべてが大変でした。初めての会合では男の先生がお茶をすすめて下さいました。「すみません、私はお茶を頂きませんので……」男の先生は「ほう！茶断ちですか」と、その日はそのまま終わりました。

翌日、女性役員の方が、「塚田さん、お茶飲まないからコーヒー持って来たわ」と好意を示して下さいました。私はモルモン教会に行っていること、「知恵の言葉」のこと、安息日は教会へ行くので休むことなどを話しました。皆、はじめは、げげんそうに顔を見合わせていましたが、納得してくれました。それからは白湯を注いでくれるようになりました。

私はできるかぎり明るく人前で仕事をし、男性と張り合うより、人と人の<sup>必要</sup>の役割りを果たせたらといつも考えました。PTAの本部役員の立場上宴会の席に出席することが多くあります。ある年には校長先生の退職があり、送別会など4、5回も宴会が設けられました。そんな時、勧めがあれば一番に讚美歌を唱いました。司会者が「こちらは聖人の塚田さんです。せいじんのせい

は聖でして……」と紹介されたことがあります。私も臆せず笑いながら「聖人の塚田です」とそれに応え、皆も共に笑いました。私の所にはいつもジュースが配られます。

こんなふうでありながらも、家族と共に集まる時はいつも私たち家族に声をかけてくれます。仲の良い友人がたくさんできました。友人の家には、麦茶やコブ茶がいつも備えてあります。「塚田さんは世界が違うからこんな事はわかってもらえないかもしれないけれど」と言いながらいろいろ相談を受けました。今では酒やタバコの好きな人に「体によくないからやめなさい」と真剣に言うようにしています。

心を開いて人を受け入れる時、人も自分を受け入れてくれます。人の心を変えるのは難しいですが、私達モルモンを愛人（聖人）と呼びながらも、人々は私たちの誠意を快いものに思ってくれます。こんな私でも主にあって世の中の清流の源となれると自負しております。（つかだ・としこ 1941年生まれ、東京西ステーキ部プライマリー会長）

▼参加チーム全員による課題曲：讚美歌No. 291を大合唱。

## 沖縄ステーキ部扶助協会主催 老若一体となり 気迫の込めった 第1回コーラスコンテスト 開かる

去る6月5日、沖縄ステーキ部扶助協会主催による「第1回コーラスコンテスト」が行なわれ、12あるワード部・支部の内8グループが参加し、美声を競い合った。

今回の審査員には、声楽家として外国でも数多くのステージを踏んでおられる琉球大学講師の泉恵徳氏を招いて行なわれたため、出場する姉妹たちも一流の審査員を前に気迫の込めったコーラスを披露した。

プログラムは厳粛な内にも、和やかな温かい雰囲気の中で行なわれた。特に注目を集めたのは70代から80代の姉妹たちが揃いの衣装に身をつつみ、乙女のように潑刺とした美しいコーラスを披露したことである。年輩の姉妹たちの中には、一度はステージで歌いたいと夢にまでみていた人たちがいて、その望みがかなえられた喜びはひとしお

であった。今後も続けてこのような発表の機会をもちたい。最優秀賞は那覇第2ワード部に贈られ、優秀賞は小録ワード部と那覇ワード部が受賞した。（レポート：沖縄ステーキ部広報）





「青春に涙はいらない」(秋元書房・55年6月発刊)の表題の下に、**波瀾**に富んだ20年の半生を自伝小説の形で世に著わしたものがベストセラーとなり(1980年7月、文庫の部門で第5位にランク)、伝道に役立てた教会員がいる。正木恵子姉妹がその人。岡山伝道部で専任宣教師をしていた頃、この本を読んで感銘した多くの人々が彼女から福音を聞くことになった。



## 一冊の本から



東京南ステキ部恵比寿ワード部

正木 恵子

んなお話があります。  
 女の子が消えてしまった虹の方を見て、「あんなにきれいだったのに……。どうせ消えてしまうのなら、最初から見なかった方がよかった」と言うと、その母親が「でもあんなに美しいものがこの世界にあることがわかったでしょう」と答えました……。

出会いは何と素晴らしいのでしょうか。いつか別れてしまう人でも、その人と出会ったことによって多くの素晴らしい経験を分かち合い、豊かな人生が送れることを、私はこれまで何回も繰り返し味わってきました。その中でもとりわけ感銘を受けた出来事が幾つかあります。

今から4年前、ステキ部の卓球大会で私はひとりの作家である兄弟と偶然隣合わせました。親しくなるにつれ、私は彼から自叙伝を書いてみないかと勧められるようになりました。「まさか……」と最初は気にもとめませんでした。が、「出版されたら、伝道資金に」という彼の言葉に促され、私は自分自身に挑戦してみよう決心しました。

私は10歳の時、母を結核で亡くし、2年後に再婚した父もその15日後に癌で倒れ、義母の1年間の看病虚しく他界してしまいました。義母はわずか1年余りの結婚生活にもかかわらず、血のつながりのない私たち4人のきょうだいを、我が子同然いやそれ以上に愛し育ててくれました。そんな勇気ある母に感謝しながら原稿用紙に向かいました。

1980年6月、「青春に涙はいらない」というタイトルで全国配本になった時、私はすでに宣教師として働いていました。同僚と

一緒に本屋に入った時の心の高なりは今でも忘れることができません。高名な作家の本が立ち並ぶ中、私の本が新刊書として山積みされていました。それを見た瞬間、私は驚き、自転車で方々の本屋を駆け回り、本当に自分の本が出版されたことを知って感動に震えました。その内の1冊を握りしめ、私は心の中で「お母さん！」と叫んでいました。

それ以来どういう訳か、その本を買ってくれた人たちと伝道中に数多く出会い、たくさんの人々の改宗を見ました。また各地の読者の方々から「この本を読んで今までの自分の気持ちが恥ずかしくなり、精一杯生きなければと思いました」との手紙を何通もいただきました。家族に対して感謝の気持ちが持てた、難しい人間関係に成功した、受験生活に耐え無事合格できた、などたくさんのお話を伺うことができ、多くの素晴らしい友人を得ました。おかげで帰還後も福音を伝える機会に恵まれ、多くのバプテスマを目にできました。

そんな折、ある素晴らしい方とこの本を通して巡り合い、3カ月間にわたって神様の愛と証を伝える機会がありました。深い教養を身につけ、人格的にも敬愛すべき方でしたが、最終的には永遠の真理を信仰により探す道を選んで下さりませんでした。肉身を失ったようなショックに打ちひしがれている私に、ある友人が「彼に福音の種をまくことができたことにあなたは感謝すべきです。彼の本当の改宗は今始まったのです」と言ってくれた時、私は次のような神様の声を聞いた思いがしました。「それで

あるから、あなたたちはこれからもキリストを確く信じて疑わず、完全な希望の光を抱き、神とすべての人とを愛して強く進まなければならない。……さてごらん私の兄弟たちよ。これがすなわち道である。」(II ニーファイ31：20—21)

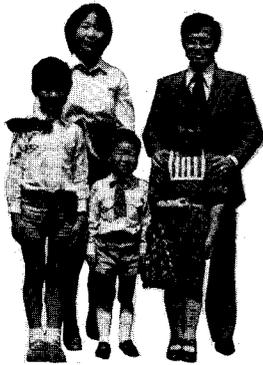
母の示してくれた愛のゆえに、また自伝を書くように勧めて下さった兄弟との出会いのゆえに伝道に出られ、多くの刈り入れを見ることができました。今なおその本を通して知り合うことのできる素晴らしい人人のことを思う時、私は本棚の中の1冊を見つめながら、神様の測り知れない大きな深い愛に圧倒され、つい涙してしまいます。

人生は出会いであり、愛を分かち合うことであり、イエス・キリストの福音を実践する場です。それを私は身をもって感じています。(まさき・けいこ 1954年生まれ、元岡山伝道部専任宣教師)



◀「今でも読者から便りがきます」と語る  
正木姉妹。

右：若桜木凌著「青春の試練を生きた恵子の記録—青春に涙はいらない」  
\*若桜木プロダクションに所属していたため、また出版社の意向で、本人名ではなく、プロダクションの社長名でこの本は出版された。



指におすび、心の碑にしるす

# 聖典からの物語

教会教育部地区指導主事  
町田ステーキ部平塚支部

謝花 良康

**我**が家には「聖書物語（新旧）」、「モルモンけいものがたり」と揃えてありますが、この「聖典からの物語」を初めて手にした時、その装丁の漸新さに目を見張る思いがしました。

まずあげられるのが今までに見られなかった横長の本であること、そして重量感のあるハードカバー。そこかしこにスマートさが感じられ、スタッフの知恵が伺われます。また、章の見出しの書体（淡古印）は、あたかも古代遺跡の発掘現場から浮き彫りにされたようで、まさに賢明な選択と言えますでしょう。

表紙の絵に、「従順の模範、信ずる者の鑑」とうたわれているアブラハムが、犠牲に捧げんとしたわが子をしっかりと抱き締め天を仰ぐ姿が描かれています。それは、親子の絆と主への信頼を見事に表わし、美しい色彩とあいまって、素通りにできない魅力を醸し出しています。

我が家では毎週日曜日、教会に出かける1時間前に、家内と交代でこの本から2、3のお話を子供たちに読んで聞かせ、話し合いをします。また毎月2、3回、日曜日に行なう子供との面接の時にも、「聖典から

の物語」の教訓について話し合い、決心をさせます。

主は「汝ら最も善き書より智恵ある言葉を探し求めよ」と勧告され、最も良き書が「聖書と完全なる福音を載せたるモルモン経」であると教えられました。しかし聖典をそのまま読んで聞かせるには年齢的に理解が難しい部分があり、かといって前述の3つの絵物語では絵が主体となっていて、7、8歳から10歳位までの子が「指にむすび……心の碑にしるす」（箴言7：3）すにはやや印象性に欠けるきらいがありました。その点この本は、読み手が読んでいる間、子供たちは想像力を働かせ、適当に場面を想定できる楽しみがあり、確認できるさし絵と共にとても印象に残るようです。

我が家の子供たちは次のような感想を話してくれました。

**文治（9歳）**「ほくはこの本が大好きです。ほかのにくらべて横長だし、絵もほかの本はマンガみたいに小さなコマだけど、この本は大きいから好きです。お話はどれも大好きです。」

**りいな（7歳）**「とてもわかりやすい本です。『ソロモンのちえ』でにせもののおかあ

# 新刊紹介

(この物語は、モーセ8巻; 前巻6巻; 9巻に書かれています)

1. キュビト: 1キュビトは46-55センチメートル位
2. 「美しい動物」というのは、ひづめがわれていて、長すぎるもの。その他は情くない動物とされた。たとえば、羊は情くない動物であるが、ワニとかネコは情くない動物である。
3. 巻詞: 稀雑とむすふ特別な巻詞

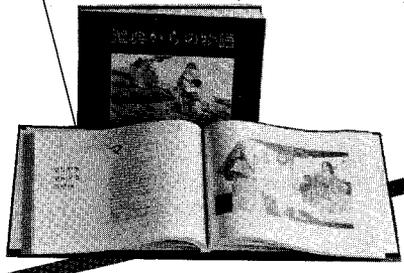


に、はこ菊にもどつもう一度、ハトをはなをくわえていました。もうわを知ったのです。もうた。しかし、答度は確った。地上に、柱む場所

菊の甲でござし、それから、ました。ノアは、地が半分にすようにと稀雑がおっしゃりました。

室のために祭壇を作りました。いることを知りました。慈愛の情い動物を1びきすつ、鳥を1ました。このような稀雑によした。稀雑が救われ、菊ながらえたこと。お祈りの甲で、ノアは稀雑にもほさないでほしいとお願いしました。稀雑はノアと、もう決して、こうと誓約していただきました。その時かして、室に、にじがかかるようになった

## アブラハムとサラ



### 見るから読むへの第一歩

本書は小学生から理解できるように、表現は平易にされ、すべての漢字にはふりがなが付されている。また難解な用語には脚注が施され、便利な索引が巻末に設けられている。「天上の大会議」から「ジョセフの最初の示現」までの流れが旧・新約聖書、モルモン経を主体に、年代順に54の物語にまとめられている。さし絵85点(カラー54点含む)は、一つ一つの物語を一層楽しいものとしている。

**「家族のための求道者標準教育法」(改訂版レッスンプラン)**  
(A4変型 70ページ 500円)

従来ものより、かなり簡略化されているが、教える概念の骨組みは初版とほぼ同じである。したがって、従来と同じフリップチャート(700円)を使用することができる。

### 「聖典からの物語」

21×26.5cm ハードカバー  
全272ページ 1,000円

さんは、ほんとうに赤ちゃんをほんぶんにすることにさんせいしたのかしら？」

研登(5歳)「ぼくはノアのはこぶねのおはなしがすきです。アブラハムとサラもすきです。」

この本は値段も手頃ですし、子供だけでなく広く一般の人々にも受け入れられると確信しています。是非一家に一冊と皆さんにお勧めしたいと思います。誕生日やクリスマスのプレゼントに最適でしょう。多くの家庭でこの本が活用され、家族の絆が強められるように祈っています。(じゃはな・よしやす 1946年生まれ、平塚支部大祭司グループリーダー)

イ  
エス様  
ブラ  
稀雑  
にふけり、未や若で  
考えることも、聞く  
うそうから、お祈  
うそうに、動物や  
アブラハムは、  
真で正直な人で、  
けたいといつも  
うそうではなく  
けることがで  
を受けるため  
稀雑はア  
なる道義を  
次に稀雑に  
りました  
のだった  
アブラ  
かし。  
は、も

## 千葉ワード部教会堂

'81年4月完成

「地域の人々のための教会」  
を目指して



東京東ステキ部千葉ワード部監督  
岩永昌治



東洋で初めてのステキ部が東京に組織される前年、1969年10月、当時のビルス伝道部長の命を受け、井上長老、ファイヤ長老のふたりの宣教師によって千葉に伝道所が開設されました。最初はいつもそうであるように、良い集会所の確保に苦勞し、8年の間に6回も移転しました。ようやく5年程前、現在の千葉市稲毛に450坪の土地を購入しました。その頃、50坪程にプレハブの仮の教会堂を建てるために、会員はひとつひとつになって、ペンキ塗り、玄関作り、床作りと奉仕をし、大変充実した時間を過ごしました。

やがて新しい教会堂の建築が開始され、1981年4月、ようやく完成しました。オープンハウスでは、教会を地域のシンボルとして地域社会に深く根ざしたものにしたいとの会員の一致した思いから、近隣の人々やママさんコーラス、著名な合唱団などを招いて音楽会を開きました。町内会長さんからもお祝いの言葉をいただき、まさに地

元住民のための教会堂という感を強めました。

他に見られない千葉ワード部の特徴と云えば、各種同好会活動をあげることができます。ヨットクラブ、絵画、料理教室、マイコン、テニス、陶芸、貯蔵、菜園などがあり、これら同好会活動を通して、地域の人々に気軽に教会へ足を向けていただき、楽しみながら福音に接してもらおうと考えました。またクリスマスのような特別な季節には、近所の方々を招待し、聖劇を初め様々な催物が開かれます。このような機会を通じて、教会に好感を持ったり、あるいは改宗する人々が増えています。

先駆者たちの信仰の上に立てられた現在のワード部には、100名以上の人々が集い、たくさんの恵みを受けています。

何百万もの人口を抱える房総半島の入口に位置し、最も広い地域を管轄する千葉ワード部の今後の発展によって、房総半島の津々浦々に福音の光をともし日が近い将来やってくることを確信しています。(いわながまさはる)



千葉ワード部礼拝堂 教会所在地：千葉市稲毛東2-7-13 ☎0472-47-5434

## チャーチニュース

**アドニー・Y・小松長老** (七十人第一  
定員会会員)  
東京神殿長に



大管長会は新たに東京神殿長として七十人第一定員会会員のアドニー・Y・小松長老を召すことを発表した。'80年の東京神殿献堂以来、神殿長を務められたドウェイン・N・アンダーセン兄弟は8月29日付で解任された。



カトリック教団の聖徒の道に鑑照した新を照らしたキリスト（キヤロー・クリック画）